子どもの社会的養育サービスの差異を知るには?

---成果枠組みの構築---

Ivana La Valle, Di Hart, Lisa Holmes, Vânia S. Pinto

The project was funded by the Nuffield Foundation, but the views expressed are those of the authors and not necessarily those of the Foundation.

Acknowledgements

We are very grateful to the Nuffield Foundation for funding the study.

The study would have not been possible without the collaboration of staff in local authorities included in the research. They were very generous with their time and we are hugely grateful for all their help. We would also like to thank the organisations that have helped us to recruit young people, parents and carers for the consultations, and the young people, parents and carers who gave up their time to speak with us. Again, without their input the study would not have been possible.

We would like to warmly thank the many people who have taken part in our workshops to comment on the emerging research findings. Their input has been very valuable in ensuring that the proposed outcomes framework is suitable for testing and implementation in the real world of local children's services.

A big thank you to our advisory group for being our critical friends throughout the course of the study: their advice, critical assessment and support have been invaluable.

We would like to thank our colleagues at NatCen Social Research and the Anna Freud Centre for their input in the early stages of the study.

Finally, thanks to Diana Jones, Project Officer at the Rees Centre, for all her help with setting up meetings, dealing with expenses, proofreading and formatting the report.

本報告書は早稲田大学社会的養育研究所がオックスフォード大学 Judy Sebba 教授と Lisa Holmes 准教授から許可を得て、原著 HOW DO WE KNOW IF CHILDREN'S SOCIAL CARE SERVICES MAKE A DIFFERENCE? DEVELOPMENT OF AN OUTCOMES FRAMEWORK を日本語訳したものです。

日本語訳作成をご快諾いただいた Judy Sebba 教授、Lisa Holmes 准教授、監訳チームで本論文をご担当いただいた明治学院大学三輪清子准教授、そして本事業に助成していただいた日本財団に心より感謝申し上げます。

早稲田大学社会的養育研究所 所長 上鹿渡和宏

目次

はじめに	8
概要	<i>6</i>
子どもの社会的養育サービスに差異があることを知っているか?	6
CSCS の成果枠組みの構築	6
CSCS のどの成果を測るべきか?	8
データを理解する	10
次は?	10
1. 序論	
1.1 この研究を行った理由	11
1.2 研究の目的	
1.3 研究方法	
1.4 報告の構成	
2. 指針と調査背景	
2.1 国内の法律、指針およびガイダンス	
2.2 監査の枠組み	
2.3 影響と成果	
2.4 背景的要素	
2.5 データの質と有用性	
2.6 組織構造と背景	
2.6.1 リーダーシップは効果的か? 2.6.2 組織的文化は効果的実践を支えるか?	
2.6.3 他機関との協力関係は機能しているか?	
2.6.4 支援基盤は適切か?	22
2.7 実践成果の質	22
2.8 結論	23
3. 調査結果	24
3.1 我々の概念枠組み	24
3.1.1 適切な環境と文化	
3.1.2 支援を必要とする子どもと家族への働きかけ	
3.1.3 子どもと家族が尊重され、彼らが必要とする支援の選択に参加する 3.1.4 子どもの成果	
3.1.4 寸ともの成果 3.1.5 実体験から学ぶ	
3.1.6 背暑	27

;	3.2 成果指標の選択	. 28
;	3.3 異なるタイプのデータ	. 28
4	提案する成果の枠組み	31
4	4.1 適切な環境と文化を測定する	. 31
4	4.2 支援を必要とする子どもと家族への働きかけ	. 35
4	4.3 子どもと家族が尊重され参加する	. 38
4	4.4 子どもの成果	. 40
4	4.5 データを理解する	. 44
4	4.5 データを理解する 4.5.1 三角法による測定	
4		. 44
4	4.5.1 三角法による測定	. 44 . 45
2	4.5.1 三角法による測定	. 44 . 45 . 45
4	4.5.1 三角法による測定4.5.2 他機関の役割4.5.3 CSCS の資金	. 44 . 45 . 45 . 46
2	4.5.1 三角法による測定 4.5.2 他機関の役割 4.5.3 CSCS の資金 4.5.4 社会的、経済的、人口統計学的および文化的要素	. 44 . 45 . 45 . 46
	4.5.1 三角法による測定 4.5.2 他機関の役割 4.5.3 CSCS の資金 4.5.4 社会的、経済的、人口統計学的および文化的要素 4.5.5 異なるニーズを持つ子どもと、異なるサービスの提供	444545464646
	4.5.1 三角法による測定 4.5.2 他機関の役割 4.5.3 CSCSの資金. 4.5.4 社会的、経済的、人口統計学的および文化的要素 4.5.5 異なるニーズを持つ子どもと、異なるサービスの提供 4.5.6 基準設定.	. 44 . 45 . 45 . 46 . 46 . 46

はじめに



私はこれまで長い間、子どもサービス(Children's Services)のシニアマネージャーを務めてきました。現在は、ハンプシャー群とワイト島の子どもサービス局長を務めています。私はまた、子どもサービス局長協会の基準実績審査委員会(The Standards, Performance and Inspection Committee)の議長にも就いています。

私がシニアマネージャーになって以来、私たちはずっと、子どもの社会的養育制度の組織的な健全性を素早く確認できる、主要な実績評価指標セットの「聖杯」を探し続けています。私たちが今でも探し続けているという事実は、それがとても複雑で微妙であり、簡単な答えはないということを物語っています。最近では、Munro教授が「データの知的活用(intelligent use of data)」と称したように、現場と学会において手元にある情報をより包括的に分析するようになってきました。それはますます、シンプルな問いを捉える試みに活かされているものの、満足のいく答えを得るためには、多くのデータと知性を必要とするようになってきています。

同様に、相互改善のために協働する自治体で構成される新たな地域改善同盟が、基準設定のために共有 するデータセットを作成しています。

これは喜ばしいことであり、このプロジェクトはデータベースへのさらなる価値ある貢献をします。私が、これは「答え」を提供するものではないと言っても失望なさらないでください。過去 20 年の経験から私たちが学んだことは、唯一の答えなどないということです。しかしこれは、私が皆さんにゆだねる旅の重要な第一歩なのです。



Steve Crocker OBE (大英帝国勲章)

ハンプシャー郡およびワイト島子どもサービス局長 (Director of Children's Services, Hampshire County Council and Isle of Wight Council)

概要

子どもの社会的養育サービスに差異があることを知っているか?

我々の研究では、子どもの社会的養育サービス(children's social care services: 以下 CSCS¹)が十分な情報に基づいてサービスの計画と提供を決定するためには、より良いエビデンス が必要であるという一致した見解があることが明らかになった。特に、財源が減少している時期には、CSCS の需要が増えることにより、その圧力は一層高まる。

地域のエビデンスの基盤を改善する第一歩として、CSCS の成果枠組みの構築も必要だった。この報告書で提示される枠組みは、これらのサービスを計画、提供、および利用する人々の視点と、調査のエビデンスに基づくものである。

この成果の枠組みは、教育省 (DfE) が収集した国の行政データを代替するのではなく、補完することを意図している。枠組みが地域レベルで有用であると証明されれば、パートナー機関とともに用いることや DfE とオフステッドが求めるデータ項目に一致させることが必要である。 そうすることで、CSCS の有効性と子どもとその家族への影響について理解するための、より体系的なアプローチが可能となる。

CSCS の成果枠組みの構築

サービスが意図された影響を与えているかどうかを評価するため、どの成果を測定すべきか。これを決定するには、最初にこれらのサービスからどのような利用者の変化が期待されているのか(すなわち、利用者成果)、次にそのような変化がいかにして達成できるのか(すなわち、中間的成果)を提示する必要がある。

我々の調査結果から、中間的 CSCS の成果をモニタリングするためには、以下の問いに取り組む必要があることがわかった:

- ・ CSCS の指導者は、良いソーシャルワーク実践を支える、適切な環境と文化を創り出しているか?
- ・ CSCS は、支援を必要とする子どもと家族に働きかけ、適切にニーズを評価し、彼らが必要とし、受ける権利のある支援を提供しているか?
- ・ 子どもとその家族が、尊重されていると感じ、サービスと支援によってエンパワメントされている と感じているか?

CSCS が期待される**利用者**(すなわち、彼らが法的責任を負う子ども) **への成果**をあげているかを評価するためには、以下の問いに取り組む必要がある:

- ・ 要支援児童は、彼らが生活する家と地域で安全か?
- ・ 彼らは、健康的で幸せに生活し、発達的、身体的、認知的、社会的、情緒的な一定の段階に達する ための支援を CSCS から受けているか?
- 彼らは、教育面で進歩し、ポジティブな教育体験を得るための支援を CSCS から受けているか?

¹ 監訳者注:以下、子どもの社会的養育サービスのことを CSCS と表記する。

図1の一番下に述べられているように、我々の調査結果から、サービスの計画と提供には、サービス提供者と利用者の視点に基づく情報が必要であるという一致した見解が広がりつつあることが明らかになった。

この枠組みは、CSCS の活動と、どのようにしてその有効性を測るかに焦点を当てている。

社会的、経済的および文 共同コミットメントと 他機関の役割 化的背景 CSCS への支援 CSCSは、支援を 要支援児童-安全 必要とする子ど 子どもと家族を尊 よいソーシャ に生活できる - 健 もと家族に働き 重し、彼らが必要 ルワークの実 康で幸福である -かけ、彼らの権 とする支援を選択 践を支える適 教育面で進歩し、 できるような関係 利を行使するた 切な環境と文 ポジティブな経験 めの支援を提供 性の構築 化を整える をする する スタッフ、子ども、家族の経験から学ぶ

図1:CSCS が要支援児童とその家族の生活にポジティブな変化をもたらす構造

しかし、この枠組みにより生成されるデータを分析する際には、以下を含むその他の重要な影響があることを考慮するべきである:

- ・ 家族が生活し、サービスが行われる背景。サービス利用者には、困窮している人、ホームレス状態にある人、そのほかの不利な立場に立つ人、またほかの社会文化的背景を持つ人がいる。そして彼らが、どのようにして、(サービスを提供する)機関からそれぞれの背景による影響を考慮された異なる対応を受けられるかということが含まれる。
- ・ 法人からのサポートのレベルは、主に十分な予算の割り当てと部署間で傷つきやすい子どものニーズを優先することを通して、CSCS が効果的に活動を行うための重要な役割を果たす。

・ CSCS の支援を要する子どもと家族の特定を促す他機関の役割。さらに、CSCS が効果的な「サービス のコーディネーターであり権利の擁護者」でなければならない一方で、要支援児童に変化を与えう る多くの効果には、CSCS のもたらす効果だけではなく、別の子どものサービスや親・養育者が支援 を必要とするときに機能する大人のためのサービスの効果もある。

CSCS のどの成果を測るべきか?

以下の表では、最後の欄に、子どもに対して期待される測定可能な成果が、他の欄には、これらの最終 目標を達成するために必要な中間的成果が示されている。成果枠組みはすべての要支援児童(すなわち CSCS が法的責任を負う子ども)を対象としている。

表 1 に示される中間的成果、また子どもの成果が達成されたかを評価するためには、この報告書で詳述されている、明確で、観察や測定が可能な指標の特定が必要となる。このうちいくつかは既存の指標(たとえば、国立公共児童データベース(National Pupil Database)内)であり、他は既存の地域のデータ(たとえば、ケースファイルおよび監査結果)を利用して作成できる。一方、一部は CSCS のスタッフおよび利用者から新たにデータを収集する必要があるだろう。

表 1: CSCS の成果

優れた実践を支える適	支援を必要とする子ども	子どもと家族が尊重さ	子どもの成果
切な環境と文化	と家族への働きかけ	れ、参加する	
効果的なリーダーシッ	連携する機関が支援を必	子どもがスタッフを信頼	子どもが生活の場におい
プ	要とする子どもを見分け	しており、安定した協力	て安全である(家/措置
	ることができる	的な関係を築いている	先、および彼らの地域に
ソーシャルワークの価			おいて)
値と倫理へのコミット	要支援児童の効果的な特		
メント	定	親/養育者がスタッフを	子どもが生活の場に馴染
		信頼しており、安定した	んでおり幸せである
振り返り学習をサポー	危害のリスクにさらされ	協力的な関係を築いてい	
トする文化	ている子どもの効果的な	る	子どもが安定性と永続性
	特定		を得ている
効果的な多機関協働		子どもが自らのニーズの	
	家庭で安全に養育されな	特定と、支援の計画に関	子どもが行動面、精神面、
十分な支援基盤	い子どもの効果的な特定	与している	社会面において良い発達
			を遂げている
良い実践とはどのよう	子どものニーズに合った	親/養育者が自らのニー	
なものかについての共	適切な支援	ズの特定と、支援の計画	子どものメンタルヘルス
通理解		に関与している	面でのニーズが満たされ
	ケアリーバー (care		ている
すべてのレベルにおけ	leavers) が継続して共同	子どもが自らのニーズに	
る安定した人員	親の支援を受ける	合ったサービスであると	子どもが早期教育を受け
		考えている	ている
やる気のあるスタッフ			
		親/養育者が自らのニー	子どもが教育を受けてい
適切なスキルを持った		ズに合ったサービスであ	る
人材		ると考えている	
			子どもが安定したポジテ
			ィブな教育体験をしてい
			る
			子どもが教育面で進歩を
			遂げている

データを理解する

注意すべき点は、枠組み内のいずれの基準も、単独で用いるために設定されていない点である。CSCS が活動する複雑な状況と、我々の社会の中で最も傷つきやすい子どもと家族に対して行われる支援を把握するためには、さまざまなデータソースからの複数の基準を用いる三角法による測定²が必要となる。

枠組みは、組織内の**通常の業務の観察**のために用いられる。また、**改善を要する**分野を特定し、改善計画が意図した効果を発揮したかを評価するために用いることができる。枠組みはさらに、オフステッド向けの年次自己評価や、地域で改善に向けて連携する組織において、自治体が共有するのに有益となりうるエビデンスを提供する。

次は?

この枠組みは、CSCS が適用される複雑な状況と CSCS が提供する多様な支援パッケージの評価に利用できる統計的エビデンスの改善に必要な道のりの第一歩である。次の段階では、提案された指標を収集する実現可能性と、サービスの計画および提供におけるデータの有用性をさらに発展させて、テストすることが必要になる。いずれ、提案された指標のうちのどれが改善された成果と確実に関連しているかを検証し、CSCS の健全性を示すバイタルサインをまとめることが可能になるかもしれない。

 $^{^2}$ 監訳者注: 三角法 (トリアンギュレーション) とは、ノーマン・K・デンジンが 1978 年の著作の中で提唱したもので、方法論や検証方法を複数設定することで、質的研究の妥当性を高める方法として考案された

⁽Denzin1970,1978,1989)。一つの現象に対して様々な方法、研究者、調査群、空間的・時間的な設定、異なった理論的立場を組み合わせることをいう。

1. 序論

この報告書は、サービスの計画者、提供者および利用者の視点と研究エビデンスに基づいて CSCS の成果枠組みを作成することを目的とした研究の結果である。この枠組みは、自治体が十分な情報に基づいてサービスの計画と提供に関する決定を行うことを支援するためのものである。また、教育省 (DfE) が収集した国内統計を代替するのではなく、補完することを意図している。この成果の枠組みは、自治体が地域の CSCS の活動の状態と、CSCS が子どもやその家族に与えた変化を理解するうえで、新しいデータと既存のデータの組み合わせがどのように役立つかを示している。

この章では、研究の背景、趣旨と目的を述べる。また、研究方法の概要にも触れる。

1.1 この研究を行った理由

我々は2016年に、以下の内容について確固たる分析を行うため、根拠があり信頼できる国内データが存在するかの評価を目的とした予備調査(La Valle et al., 2016)を実施した:

- ・ 社会的養育サービスを受ける権利がある子どもとその家族を特定し、働きかける CSCS の能力
- ・ CSCS の質
- ・ これらのサービスを利用する子どもと家族の生活に CSCS が及ぼす影響

エビデンスのレビューにより、CSCS の実践のアセスメントは主に手続きと法的プロセスに焦点を当てていることがわかった。レビューにより、要支援児童¹とその家族にとってポジティブな成果を達成するためには何が役立つかについてのエビデンスをいくつか特定することができた。しかし、このエビデンスは、質を測定し、CSCS 利用者に対するポジティブな成果との関連性を確立するために体系的に使用できる標準的指標というよりも、主に良いソーシャルワークとはどうあるべきかという話の説明に基づくものであった。

同様に、エビデンスは、優れた実践と効果的なサービスの提供を支える組織的特徴について広がりつつ ある一致した見解を示している。一方で、比較を可能にする単一の標準的なアプローチではなく、これら を測る複数の方法が存在している(La Valle 他, 2016)。

我々は、オフステッド審査および DfE 子どもの社会的養育データ[要支援児童 (CiN) 調査 (DfE, 2018b) および社会的養護児童 SSDA903 データ (DfE, 2019)]等、CSCS の監査に現在使われている主要な国内データ資料を分析した。この分析の結果、DfE 子どもの社会的養育データ (DfE children's social care data) とオフステッド単一監査枠組み審査 (the Ofsted Single Inspection Framework judgements) との間に、一貫した関連性は見られなかった。例えば、重要な DfE の子どもの成果指標データでは活動のレベルが良いと思われる 6 つの機関のうち、(オフステッド審査では) 2 つが「不十分」、1 つは「改善を要する」と判定されていた (La Valle et al., 2016)。

エビデンスをレビューした結果、CSCS が関与した際に期待される、子どもと家族の生活の変化に関する統計的エビデンスはほとんどなかった。また、CSCS から期待される成果、またはそれらの成果を測る方法について一致した見解がないことが分かった(La Valle et al., 2016)。英国会計検査院(National

Audit Office) による最近の分析では、自治体の支出とオフステッドの判定に関連性がないことが示されている (National Audit Office, 2019)。

2016年のセミナーにおいて、部門代表者、学術専門家、政策立案者とこれらの結果について議論した。 この協議会は、重要な利害関係者の視点と期待および研究のエビデンスを反映して、CSCS に期待される 成果の枠組みを作成する必要性を提言した。

¹ 子どもの社会的養育サービスが法的責任を負う子どもの意味で、1989年の児童法における CHILDREN IN NEED (要支援児童) の定義を用いている。

1.2 研究の目的

この研究の包括的目的は、サービスの計画者、提供者と利用者の視点および既存のエビデンス基盤に基づき、CSCS の成果の枠組みを作成することであった。より具体的な研究の目的は以下の通りである:

- ・ 期待される、測定可能な子どもに関する CSCS の成果、中間的成果 (例:組織およびソーシャルワークの実践の特徴) およびこれらの最終目標を達成するために必要なサービスの改善を示した枠組みの構築
- ・ 中間的成果と CSCS を利用する子どもの成果を測定するために利用でき、これらのサービスが彼らの 生活に変化を与えたか、またどのように変化を与えたかという質問に答える手助けとなる、複数の 指標を確認する
- ・ 既存の指標を使って推奨される成果をどの程度測定できるか、既存のデータを利用して新しい指標 を作成できるか、またどのような新しいデータが必要となるかを検討する

我々が提案する枠組みは、DfE が収集した国内行政データを代替するのではなく、補完することを意図している。最新の DfE レポートには、以下のように述べられている:

「全国レベルの成果情報は、全体像の一部のみを示すものである。制度に関わる人々の質および経験に関する問いは、地域レベルで調査される必要がある」。(DfE, 2015 p. 3)

この枠組みは、自治体がサービスの計画と提供について十分な情報に基づいた決定を行うことを支援するために内部利用できるようデザインされている。後述するように、この成果の枠組みは、自治体が地元の CSCS の活動の状態と子どもに与えた変化を理解するうえで、新しいデータと既存のデータの組み合わせがどのように役立つかを示している。成果の枠組みは、「通常の業務」の観察に用いられる。また、改善を要する分野を特定し、改善計画が意図した効果を発揮したかを評価するために用いることができる。

枠組みは、自治体間で共有される有用なエビデンスを提供する。例えば、このエビデンス は、オフステッドに毎年提出する自己アセスメントをまとめる際に用いることができる。さらに自治体の間では、例えば地域で連携する組織同士で、サービスの成果を比較することに強い関心が寄せられている。枠組みは、地域および全国部門による改善策の情報を提供するためのデータを生成することができる。我々の

提案する枠組みは体系的な比較分析を可能にする。しかしながら、一方で、どのデータを共有し、どのデータを内部での利用に限定するかを決めるのは自治体に委ねられる。

枠組みが地域レベルで有用であることが証明されれば、さらなる検討事項は、パートナー機関との使用に適応させることである。そして CSCS の有効性と影響を理解するためのより体系的なアプローチを提供するために、DfE とオフステッドのデータ要件に、枠組みを一致させることである。

サービスの 計画 •要支援児童とその家族のニーズを満たすうえで、効果的に機能するサービスの分野、または上手く機能しない分野に関する、リーダーとマネージャー向けのエビデンス

実践の改善

•改善するため、また、改善計画が意図した効果を発揮しているかを評価するために必要な事項に関する、スタッフ向けのエビデンス

説明責任

•CSCSの関わりが要支援児童とその家族の生活に与えている変化について、 利害関係者と共有するためのエビデンス

図2:成果枠組み:計画、改善、説明責任を支援するエビデンス

1.3 研究方法

この研究には、4つの構成要素が含まれる。すなわち、迅速なエビデンスの審査、4つの事例の綿密な研究、CSCS 利用者の意見調査、また、中間調査結果を検証するためのワークショップである。

我々は、関連する政策や方針文書、調査研究、およびその他の CSCS データ枠組み (35 の資料を審査) を迅速にレビューした。レビューは、その他の重要な研究も検討しつつ、我々の予備調査 (La Valle et al., 2016) から 2019 年 5 月の間に発表された資料に焦点を当てて実施された。レビューは英国の子どもの社会的養育制度に焦点を当てており、外国の文献は対象としなかった。

2018 年 5 月から 12 月にかけて、4 つの自治体における綿密な事例研究が行われた。これらの自治体の中には、サービス計画に反映させるためのエビデンス収集に多大な投資をした自治体や、意思決定プロセスに利用できる情報の改善に関心をもつ自治体も含まれていた。事例研究には、最前線のスタッフと中堅のマネージャーとのフォーカスグループ、シニアマネージャーおよび実績管理チームとの詳細なインタビューが含まれている。合計で、さまざまなサービスを網羅する 37 人の回答者(例:障害児、ケアリーバー、社会的養護児童)がフォーカスグループに参加し、13 人の情報提供者への詳細なインタビューが行われた。回答者には、CSCS を利用する子どもと家族の生活にポジティブな変化をもたらすには、CSCS はどのように活動すべきと考えるか、またサービスが意図されたとおりに機能しているかを評価するために、理想としてどのような情報が必要かという質問がなされた。我々はさらに、現在地域レベルで CSCS の計画とモニタリングにどのようなデータが使用されているか、またこのデータが適切かどうかについての所見を検証した。

2018 年 6 月から 2019 年 3 月にかけて、我々は CSCS を利用した経験のある若者、親および養育者を対象に意見調査を行った。これらの回答者は、さまざまなサービスの経験が反映されるように選出された (例:ケアリーバー、障害児、児童保護、里親および家族養育者)。合計で 17 人の若者、33 人の親/養育者および里親が、10 のフォーカスグループに参加した。これらのグループは、どのようにして CSCS が利用者のニーズを満たしていると把握できるか、またどのようにして彼らの生活に変化をもたらすことができるかを調査した。

2019年の1月から6月にかけて、10回のワークショップにおいて100人の部門代表者から我々の中間調査結果と成果の枠組みに対するフィードバックを収集した。この意見調査で得たフィードバックは、我々の成果枠組みをさらに発展させ、洗練させる目的で使用された。ワークショップは、事例研究に含まれる自治体、自治体協会青少年委員会(Children and Young People's Board of the Local Government Association)、DfE の子どもサービス局長協会(Association of Directors of Children's Services)、CSC データ・ユーザー・グループ、CSCS の全国実施情報管理グループ、What Works Centre for Children's Social Care と共に開催した。

1.4 報告の構成

2章では、迅速なエビデンスのレビューの結果について考察する。我々の文献のレビューは、子どもの 社会的養育制度の複雑さと微妙な差異、そしてサービスが行われる背景を理解することの重要性を浮き 彫りにする。

3 章では、CSCS が要支援児童の生活にポジティブな変化をもたらすことができる構造等、我々の概念枠組みを提示する。枠組みは CSCS のリーダー、スタッフおよび利用者から集めたエビデンスを用いて作成された。この章では、枠組みに含まれる成果指標を選択するうえで使われた要件、そして、これらの指標を測定するうえで必要となるデータのタイプについて説明する。

4章では、概念枠組みで概要を示した中間的成果と子どもに関する成果の測定に必要な指標の組み合わせの概要を述べる。我々の提言は、CSCS のリーダー、スタッフ、利用者の意見調査と、既存の研究および関連するデータの枠組みやツールの審査に基づくものである。この章では、さまざまな問いに答えるために、これらの指標を分析する方法の範囲について論じる。

5章では、我々の成果の枠組みが、いかにして CSCS の計画とモニタリングに利用できる統計的エビデンスを改善できるか、また、枠組みを試行するための以降のステップについて手短に述べて締めくくる。 以下に、これからこの報告書で提示する調査結果を考察するうえで、留意するべき要点を示す。

- ・ 成果枠組みはすべての要支援児童――つまり、CSCS が法的責任を負う子どもを対象としている。
- ・ 枠組みには、CSCS と、要支援児童とその家族に対する CSCS の義務と責任に焦点を当て、 CSCS の利用者のニーズが満たされているかどうかを調査する基準が含まれる。これらの子ど もと家族の生活は、社会的、経済的、文化的影響、および他の機関が提供するサービス等の 他の要因にも影響を受ける。我々の枠組みには、こうしたその他の重要な影響の基準は含ま れないが、分析の際にこれらの影響を検討し、調査する方法を提案する。
- ・ 枠組み内のいずれの基準も、単独で使用することは意図されていない。1 つの統計、または 少数の統計の組み合わせでは、CSCS が運用される複雑な状況と、我々の社会の最も傷つきや すい子どもや家族に対して CSCS が提供する支援を把握することはできない。この複雑なもの を把握するには、さまざまなデータソースからの複数の基準を使用した三角法による測定が 必要である。
- ・ この枠組みは、戦略的および運営上の意思決定において、安定した適切な統計的エビデンス が果たす役割の重要性を浮き彫りにし、目的に適さないデータに基づくアセスメントに異議 を唱えることを意図している。
- ・ この枠組みは、CSCS が提供する多様な支援パッケージによる影響の評価に利用できる統計的 エビデンスの改善に必要な道のりの第一歩である。次の段階では、新しいデータを収集する ために必要な手段を開発し、既存のデータから作成できる基準を試すための試験が必要とな る。完成された枠組みが、政策や方針、実践および子どもと家族のニーズの変化を正確に把 握できるよう徹底するためには、定期的な見直しが不可欠である。

2. 指針と調査背景

前章で詳細を述べたフィールドワークと意見調査を補完するために、我々は迅速な文献レビューも行った。本章で詳しく述べる文献の審査とその結果は、我々が行った前回の予備調査 (La Valle et al., 2016) の報告書に含まれる迅速なレビューを基礎としている。よって、この審査の目的は、以下に焦点を当てた新しい文献があるか調査することであった。

- ・ 効果的な子どもの社会的養育というものを定義すること: すなわち、どのように子どもと若者の成果の側面が表れるか、そしてこれらの成果を観察するためにどの指標が採用できるか?
- ・ 効果的な子どもの社会的養育というものの重要な要素を明らかにする:効果的な子どもの社会的養育の達成と維持に関連する活動およびプロセスは何か、そしてどのようにこれらを実施し定着させることができるか?

本章では、国内の法的および指針的背景を概説し、前回の予備調査の研究結果が発表された後に変更された、子どもの社会的養育の検証の枠組みの全体像を詳述する。CSCS が活動する背景に関する文献の近況と、成果と影響に関する最新のエビデンスも含まれる。成果枠組みと提言の基礎となるデータの性質と利用可能性に関する項も含まれる。

2.1 国内の法律、指針およびガイダンス

英国の自治体は 要支援の子どもとして特定された全ての子どもに CSCS を提供する法的義務を負っている。児童法(1989)で「要支援(in need)」という用語は、「自治体によるサービスがなければ、合理的な健康および発達の基準を達成または維持する可能性が低い、あるいは達成または維持する機会がない可能性が高い」、または「そのようなサービスの提供がなければ、発達が大きく遅れる、あるいはさらに遅れる可能性がある」、または「障害がある」子どもと若者と定義されている。これら要支援の子どもの一部は、家族と自宅で生活をしながら自治体の子どもサービス部の支援とサービスを受ける。他の子どもたちは、「社会的養護児童」として里親、知人/親戚、または居住型施設(児童ホーム等)に措置される。社会的養護児童は親からの依頼により任意で、または親との合意により(20条)、またはケア命令(31条)に従い、自治体が子どもに対する親責任を負うことにより社会的養護を受けることになる。要支援児童とその家族の評価のプロセスは、すべての子どもが共有する発達上のニーズ、ペアレンティング能力、そして、彼らのニーズに影響しアセスメントに含まれるべき、より広範な家族的/環境的背景を描く(HM Government, 2018 Working Together to Safeguard Children)。

最近 DfE が発表した分析では、2014 年から 2015 年および 2016 年から 2017 年の間に、150 万人の子どもが、潜在的な要支援児童または既に要支援児童とされた子どもとして子どもサービスに紹介された。このうち、110 万人の子どもが最低 1 年は要支援に分類され、40 万人は要支援ではないと判断された。2014 年から 2015 年の要支援児童の 1/3 以上が、2016 年から 2017 年でも要支援となっている(38%)。20 万人の子どもが、2014 年から 2015 年と 2016 年から 2017 年の間の全 3 年間で、最低 1 日は要支援であった。

CSCS の有効性を検討するうえで重要な要素は、CSCS が、子どもと家族に適切な支援を行っているかということである。上記のデータから分かるように、かなりの数の子どもがサービスに託されているものの、要支援ではないと判断されている。さらに、不十分または逆効果な、あるいはニーズのレベルに対し過度なサービスを受けている子どもがいる可能性がある。この点は Forrester(2017)による最近の研究で浮き彫りにされており、サービスが必要な家族と適度な関与を評価する難しさについて考察されている。Forrester は、均衡性の問題と CSCS がサービスを必要とする家族に支援を行っているかどうかに踏み込まずに成果を評価することはできないと主張している。しかし、どのようにこれらの家族を特定し、支援がその家族にどのような変化を与えるかを判断するための解決策は提示していない。

我々が前回の予備調査を発表した時期に、DfE は子どもの社会的養育に対する戦略、Putting Children First (2016)を発表している。この戦略は、人とリーダーシップ、実践と制度、管理と説明責任という、3つの基礎的な構成要素を通して、変革の達成を目指している。この戦略の下、子どもの社会的養育のすべての面において、さまざまな新しいイニシアチブがとられ、子どもの社会的養育革新プログラム(the Children's Social Care Innovation programme)の一部として革新が強調されている。第1段階のプロジェクトと付随する評価は2017年に完了し(Sebba, Luke, McNeish, & Rees, 2017)、後続のプロジェクトが進行中である。この戦略とその資金をもとに、What Works Centre for Children's Social Care が設立された。財政投資とPutting Children First 戦略の包括的な集中にも関わらず、最近の監査局の報告書(National Audit Office, 2019)では、厳格な調査の対象になっている。この報告書は、CSCSに対する需要の要因を DfE が完全には理解していないと示唆している。報告書はさらにその分析において、CSCS の支出とオフステッド審査で評価されたサービスの質の間に、関連性が認められなかったことも強調している。

2.2 監査の枠組み

英国の CSCS は、オフステッドによる監査・規制が行われる。2018 年には、自治体の監査に対する、より狙いを定めた、均衡のとれたアプローチを目指し、新しい ILACS (自治体子どもサービスの監査) 枠組みが導入された。オフステッドはさらに、ILACS 枠組みが最もリスクの高い分野の特定を可能にし、その結果を受け、監査を適宜集中させると述べている (Ofsted, 2019)。新しいアプローチは、以前よりも均衡がとれ、リスクベースで、自由度があり、最も必要とされる分野で優先的に監査を実施することができるよう計画されている。さらに、自治体の子どもサービスの監査へのアプローチは、すべての社会的養育の監査に適応される 3 つの原則によって支えられている。監査は、子どもの生活において最も重要な事項に焦点を当て、一貫した期待を持って、最も改善が必要な分野を優先して行うべきである。ILACS の基本方針は、自治体の改善と、自治体が失敗する前に「受け止める」ことに焦点が当てられている。ILACS は、均衡のとれた、システム全体を考慮したアプローチを試みている。

前回の予備調査では、オフステッドの判定と 11 の子どもに関する成果(全国行政データにおいて測定されているもの)、および 3 つの労働力値の間に関連性がないことが確認された(La Valle et al., 2016)。その後の研究では、オフステッド判定と子どもの社会的養育の国内基準の関係を調査した。Hood ら (2016)は 13 年間にわたり、全国行政データセットと国税調査報告書を分析した。そして、少数の指標(47 項の調査判定、ソーシャルワークの空席率等)により、オフステッドによる不十分な判定を予測することができることを発見した。そのうえで、CSCS とその支援を受ける子どもと家族は変化することを認識しつつ、

データ分析に縦断的アプローチを導入する価値を強調している。より新しい実績指標とオフステッド判定の分析 (Wilkins & Antonopoulou, 2019) は、オフステッド判定がさまざまな自治体間で、実績の良し悪しの明確なパターンは存在しないことを示唆している。しかしながら、良い、またはとても良いと判定された自治体が、アセスメントの遅れが少ない等、いくつかの手続きに関する変数において、他の自治体を上回っていることも分かっている。

上記に詳しく述べた通り、最近のNAO分析(National Audit Office, 2018)は、自治体の支出とオフステッド判定の間に関連性がないことを示し、サービスと支援の質と価値について疑問を提示している。さらに、文献は子どもと家族に関する成果を検討する際に、実践管理が脆弱な自治体におけるCSCS(すなわち、オフステッド判定で改善を要するまたは不十分と判定されているもの)を支援するための介入が、最初の1~2年間で子どもと家族に関する成果に(変化をもたらすとしても)多くの変化をもたらす可能性は低いと示唆している(たとえば、Beninger & Clay 2017; Beninger, Newton, Digby, Clay, & Collins, 2017; Bryant, Parish, & Rea, 2016)。

2.3 影響と成果

我々が予備調査で強調したとおり、プロセスの結果の指標への過度の依存が見られ(La Valle et al., 2016)、その状況は変わっていない。この間、社会的養育支援を受ける子どもと家族に関する成果と、それを体系的に計測する方法についての研究はあまり発表されていなかった。さらに、影響に関する研究が行われた際は、CSCS を総体的にとらえるよりも、特定の介入に焦点を当てる傾向が見られる。Sebba ら (2017) は、DfE 子どもの社会的養育革新プログラム評価の分析において、法定のデータ回収の一部として常に利用できる指標等の、13 の確固とした成果を特定した。これらの使用と測定には評価ごとに差があり、実践の質、正しい成果が正しい方法で正しい子どもに対し達成されたかという指標よりも、プロセスの結果の指標に過度に依存していることが浮き彫りにされた。例えば、革新プログラムの評価で最も一般的に引用されている成果は、社会的養護児童数の減少である。

最新の研究は、新たに設立された What Works Centre for Children's Social Care が、その研究と評価のための成果枠組みを作成するために行った研究である⁴。この枠組みは、権利に基づくアプローチ、また、単純な成果に基づくアプローチと並行して権利に基づくアプローチを行う複雑さと困難さを強調している。What Works Centre はさらに、子どもと若者の視点と経験を強調し、子どもが定義する成果の基準を含めることに言及している。ただし、これらはまだ定義されていない。

Forrester (2017) はさらに、課題について利用者が定義する進歩の基準を利用すること、および課題 点を解決するうえで CSCS が十分な支援を行っているかに焦点を当てることを主張している。例えば、目標達成スケール (GAS) は、家族が支援を必要とする多様な課題に適用できる、サービス利用者による成果の定義と参加の基準を提供する。

最近の研究(Selwyn, Wood, & Newman, 2017)は、ケアを受けている子どもと若者によって選択された、分野と指標に焦点を当てている。これらは、実親・きょうだい・友人・養育者・教師・ペットとの関係、虐待・いじめ・スティグマ・差別からの自由、年齢に相応しい自分史の説明、愛されている感覚、帰属意識と幸福感等の、幅広い要素を含んでいる。

最近の研究はまた、子どもと家族に直接介入する重要性と、直接介入、関係性に基づく実践、子どもと家族にとっての成果の改善の関連性を強調している。Care Crisis Review(ケア・クライシス・レビュー)(2018) は、子どもとその家族に効果的に直接介入するためには、スキルや信頼、時間が重要である

ことを強調している。この指摘は、最近の複数の研究において、直接働きかける時間が家族全員との関係を築くことにつながるとの認識と共に、強く支持されている (Baginsky, Moriarty, Manthorpe, Beecham, & Hickman, 2017; Fauth, Jelicic, Hart, Burton, & Shemmings, 2010; Sebba et al., 2017)。 文献には、分かりやすい言葉を使う、家族への実用的な支援を含める、力を共有するアプローチなど、具体的な介入の仕方も示されている。

上記で詳しく述べたとおり、子どもと家族に対するより高いレベルの直接の介入が、より良い関係を築き、子どもレベルでの成果の改善につながることを示唆する研究がある。子どもの意見と、その視点と経験を把握するメカニズムが、次第に重要視されるようになってきている。Beninger and Clay (2017) は、例えば自身の審査に貢献している子どもと若者の割合、要支援の子どもミーティングに出席している親および祖父母の割合を調査する等、実績のモニタリングデータを用いて子どもの意見が含まれているかの評価を行った。Selwyn and Briheim-Crookall (2017) は、子どもの主観的な幸福と、子どもの幸福に十分注意を払い、子どもと若者が自分の気持ちについて話すことを助け、交流の取り決めや養育計画など、自身の生活に関わる決定に参加させるソーシャルワーカーの役割の重要性を強調している。Fauthと同僚(2010) は、子どもと家族に関わる際に、積極的に聞くこと、心からの気持ちとして敬意を持つことが必要であることと、親が支援内容の決定について意見を言えたと感じた場合の、より良い成果を強調している。

⁴ What Works Centre Outcomes Framework についての詳細は、こちらを参照: https://whatworks-csc.org.uk/research/outcomes-framework-for-research/

2.4 背景的要素

我々の予備調査が完了して以降、予算が徐々に削られている時期に CSCS の需要が高まっていることを 浮き彫りにし、懸念を示す研究とレビューが多く存在する。子どもの脆弱性のエビデンスに関する最近の レビュー (Crenna-Jennings, 2018) は、子ども保護プラン数の増加、早期介入サービスの削減、および 子どもの社会的養育サービスへの圧力の高まりを指摘してきた。2018年後半に発表された最新の安全保 障プレッシャー (Safeguarding Pressures) の調査結果 (Association of Directors of Children's Services, 2018) も、過去、現在および今後予想される CSCS の需要の圧力のエビデンスを報告している。 安全保障プレッシャー研究(the Safeguarding Pressures)の第6段階は、140の自治体(92%)の調査結 果を提示することである。前年のデータを活用(2007年から2008年)して、将来的な需要を見積もる予 測モデルを使うことを容易にしている。CSCS の需要の増加に対する懸念から、部門が主導する新しいレ ビューが行われた。そして、子どもの社会的養育と家庭司法全般における危機が確認された(Care Crisis Review, 2018)。このレビューは、社会的養育に措置された子どもの増加と紹介の増加を招いている要素 を検証した。そのうえで、20の変更案を提示している(前記と同箇所)。このレビューは、閾値に影響を 与える要素の範囲と紹介率間の、複雑な相互作用を示唆している。エビデンスのレビューは、社会経済 的、環境的要素と、要支援児童率の間の関連性を強調している。しかし、このレビューは、同様の経済的・ 人口統計学的な圧迫を共有する「統計学的な近接値」が、社会的養育児童率で著しい差を見せていること も提起している。最近のエビデンスレビューにおいて、Bywaters と同僚 (2016) は、社会経済的要素が 虐待やネグレクトに苦しむ子どもの率に、部分的な影響を及ぼすと主張している。彼らは、貧困と子ども 虐待およびネグレクトの関連性に関する、主に全英外の一貫性のある確固としたエビデンスと、これらの

調査結果の転用の可能性を裏付ける全英内のエビデンスを提示している。多様なはく奪・無料給食・失業率・失業手当の受給率・障害と人種の指標を含む、貧困と虐待およびネグレクトの関連性についてのエビデンス・ベースを構築するために、CSCS 利用者から収集すべき社会経済的または社会文化的要素について相当な議論が展開されているが、これらデータの信頼性についての懸念もある。

2.5 データの質と有用性

研究は、SSDA903 (DfE, 2019) および要支援の子ども (CiN) 調査 (DfE, 2018b) 等、全国で法令によって定められたデータ回収の一環として政府部署 (例: DfE) に提出されたデータが、自治体の子どもサービス部内で保管され、使用されるデータのほんの一部であると指摘している (Holmes & McDermid, 2012; Ward, Holmes, & Soper, 2008)。

最近の実践を変革するためのプロジェクト研究(Practice Change Project; Bowyer, Gillson, Holmes, Preston, & Trivedi, 2018)では、19の自治体と共に、戦略的な運営上の計画と意思決定のための情報提供を目的とした、地方と地域レベルでのデータの利用について調査が行われた。プロジェクトの焦点は養育の危機にある子どもと若者への支援であったが、法定 CSCS を通じた早期介入事例(児童保護、要支援児童、社会的養護児童、ケアリーバーを含む)に対応した量と推移を把握するためのデータの調査も含まれた。プロジェクトでは、地域のデータセットを自治体間や子どもの社会的養育システムの様々な部分でリンクさせたり適合させたりするための様々な実践と取組みが確認された。研究では、子ども(および家族)が受けたサービスに関する特定のデータが不足していることが判明した。そして、そればかりか、しばしばデータが自治体間で体系的に記録されておらず、代わりに個別の、集中化されていないデータベースやスプレッドシート(表計算)に記録されていることがわかった。この調査結果は、McDermid が 2018年に提起した、データの利用の可能性に関連する困難の多くが、現在も存在することを浮き彫りにしている。

児童サービスの分析ツール (ChAT) は、既存データの二次的使用と有意義な視覚化の、最近の例を提示する。ChAT は、Annex A (オフステッドの単一の監査の枠組み)の子どもレベルのデータと、要支援児童、社会的養護児童、そして養子縁組に関する過去5年間に発表されている統計を用いる。それによって、自治体のための集約的な分析、統計学的な近接値、英国との比較を提供している。ChAT は、Waltham Forest Council、Hackney Council およびオフステッドの、共同データ・インテリジェンス・プロジェクト (the collaborative Data to Intelligence project) との一貫として開発され、無料の資源として全ての自治体が利用できるようになっている。

ChAT が表示する情報の多くは、(データが利用できる範囲で)過去7年間のデータを1年ごとに全国、地域および統計学的な近接値ごとに表示するLAIT⁵を使用して把握したものである。 ChAT は、情報をダッシュボード(計器盤)形式で提供している。LAIT 同様、ChAT は既存の1年ごとの行政データセットに依拠しているため、自治体の最新の分析は提供していない。さらに、定期的にデータセットを取り込む設備はあるものの、これは自治体が日常的により頻繁に、管理情報システムから必要な情報を抽出し、ツールに取り込むことに頼ることになる。ChAT は、既存データの有用な視覚化を提供するが、土台となるデータが、過程と成果に焦点を当てていることへの懸念は残る。

データの有用性に加え、基礎的な検討事項はデータの効果的利用である。Beninger and Clay (2017)は、パフォーマンスの観察データを内部監査の目的でもちいることを主張している。綿密で戦略的な自己評価の姿勢と、フィードバックと監査に対する開放的で正直な反応の必要性も浮き彫りにされている

(Bryant et al., 2016)。エビデンスを用いることと子どもサービス部内での地域の実績データの分析は、DfE 革新プログラム (DfE Innovation Programme) の第1段階の一部として、強調されている。また、自治体内における分析能力の強化例、または許容量と能力の構築を支援するために埋もれてしまっている研究者にも協力を仰ぐことが良い影響をもたらすと指摘している (Sebba et al., 2017)。より良い意思決定のためのデータの知的利用もまた、最近のケア・クライシス審査 (Care Crisis Review) (2018)で提起されている。

 5 LAIT (自治体インタラクティブ・ツール) は、教育省が開発したオンラインツールであり、全国、地域、統計学的な近接値レベルの比較可能な情報を提供し、自治体がその成果を全国的および地域的傾向と比較評価することを可能にする。これには、児童保護、社会的養護児童(LAC)、要支援児童(CIN)、年少期と若者の違反行為といった情報が含まれる。LAIT は、SSDA 903 データおよび CIN 調査データといった、義務的な回収によるデータを使用して運用されている。データが 1 年間のみ提供され、このデータのシステムにアップされるまで時間がかかるという制限がある。LAIT は以下から利用できる:

HTTPS://WWW.GOV.UK(全英)/GOVERNMENT/PUBLICATIONS/LOCAL-AUTHORITY-INTERACTIVE-TOOL-LAIT#HISTORY

2.6 組織構造と背景

前回の文献レビューにおいて、我々は組織が目的に合致していることの重要性を示した。さらに文献では質の高い実践と効果的なサービス提供を支えるために、必要な組織的特徴の種類について一貫した見解があるものの、これらをどのように測定すべきかについては、ほとんど一貫性が見られないことを明らかにした(La Valle et al., 2016)。自治体協会(the Local Government Association)に紹介され、ISOS パートナーシップが行った研究(the ISOS Partnership, 2017)は、子どもサービスにおける改善が成功するために、必要な特徴を調査した。この結果、戦略的アプローチ、リーダーシップと統治、スタッフへの関与と支援、パートナーの関与、支援機構の構築、里親養育の改革、資源の賢明な利用という、子どもサービスの改善を可能にする7つの要素が特定された。

2.6.1 リーダーシップは効果的か?

上記に詳説したとおり、DfE の Putting Children First (プッティング・チルドレン・ファースト 2016) では、リーダーシップと CSCS のスタッフは、効果的な子どもサービスの基礎的構成要素の1つとみなされている。最高の人材を集め、彼らが取り組む非常に困難だが大変価値のある仕事に必要な、正しい知識とスキルを与え、さらに優れた実践を育む能力を備えたリーダーシップを育成することが指摘された。リーダーシップはまた、オフステッドにより不十分と判定された自治体の改善に貢献する要素として言及されている。

より最近では、ケア・クライシスレビュー(Care Crisis Review 2018)が、制度に効果的なリーダーシップを定着させること、取り組みを支え、強い複数機関のコミットメントを生み出す気風を確立すること、さらに子どもの社会的養育全般の全てのレベルのスタッフおよび支援を受ける子どもと家族と、良い関係を持つことの必要性を提起している。

効果的リーダーシップと、安定し中心になるリーダーシップの確立は、多数の最近の研究で強調されている (Baginsky et al., 2017; Beninger & Clay, 2017; Bryant et al., 2016)。

2.6.2 組織的文化は効果的実践を支えるか?

多数の最近の研究が、CSCS の組織的文化に言及している。オフステッド(2019)は、スタッフが当事者意識と開放感の恩恵を受ける学習文化を促進するためには、スタッフに対する強力なサポートと大きな挑戦を試みる文化が重要であると述べている。

Beninger and Clay による最近の研究(2017)は、職場におけるポジティブな文化の、特にスタッフの 士気に対する影響について述べている。他の最近の研究は、実践についての組織的コミットメントの定着 と、ポジティブな組織文化の創造の必要性を強調している(Baginsky et al., 2017; Bryant et al., 2016)。さらに、Baginsky と同僚は、間違いを認めることが許される文化の創造について述べている。組 織文化と成果の関連については、複数の研究において、文化とスタッフの維持ならびにスタッフの疾患に 関連する指標の間の関係について調査が行われている(Beninger and Clay, 2017; Bryant et al., 2016)。

2.6.3 他機関との協力関係は機能しているか?

複数の機関のチームでサービスを行うことは、機関間での効果的な協働を支えるものとして重要視されている (Sebba et al., 2017)。機関間での境目の統一と、実践のレビューのための複数機関の監査の利用も、効果的な協働を促進する要素として言及されている (Bryant et al., 2016)。

2.6.4 支援基盤は適切か?

上記で詳述した要素と条件に加え、最近の複数の研究は、CSCS 内の支援基盤が十分か、またそうでなければ、十分であるために必要な構成要素について、そして子どもとその家族に関するポジティブな成果を上げるために必要な基盤について調査を行っている。Baginsky ら (2017) による研究は、膨大な紹介数と予算の制限に伴い、CSCS が直面する複雑な状況と困難を浮き彫りにしている。これらの問題点は、より最近ではケア・クライシスレビュー (Care Crisis Review 2018) で言及されている。 組織再編成もまた基盤に負の影響を与えることが、再編成に必要とされる時間と資源を認識する必要性と共に提示されている (Baginsky et al., 2017)。

2.7 実践成果の質

予想どおり、文献は一貫して、ソーシャルワーク実践の変更が、サービス改善の中心であることを、実践の改善と子どもと家族に関する成果の改善の関連性のエビデンスと共に示している(例: Care Crisis Review 2018; Fauth et al., 2010; Forrester, 2017; La Valle et al., 2016; McNeish, Sebba, Luke, & Rees, 2017; Munro & Hubbard, 2011; Sebba et al., 2017)。さらに、子どもの社会的養育の実践(または理想)は、人権、社会的正義、専門職規範の原則を重要視する、全英ソーシャルワーカー協会(2014)の倫理規定に基づいている。

上記で概要を示したとおり、CSCS内における関係に基づく実践と最良の実践を支えるための、さまざまなモデルと方法の導入が次第に重要視されている。研究は、良い実践 (Good Practice)の要素を提示しているが、(前述の組織構造の章で詳説したとおり)しばしば実践を支える仕組みと条件に焦点が当てられている。Baginskyら(2017)は、事例の計画をたて、計画に基づき一貫した実践を確実にすること

の有益性を強調している。さらに、Bryantら(2016)は、進捗とサービスの質を観察するための、確固とした仕組みの必要性を浮き彫りにしている。

養育を受ける子どもにとっての良い実践とはどのようなものかということが、以前よりも重視されるようになっている。最近の子どもとソーシャルワーク法案は、養育を受ける子どもとケアリーバーの支援に関する、全自治体向けの新しい共同ペアレンティングの原則を規定している。この原則には、幸福で健康な状態を促進し、子どもが意見、希望、気持ち表現することを奨励し、それらを考慮することが含まれている。さらなる例の1つは、子どもコミッショナー(Office of Children's Commissioner)(2018)による安定性の指標を開発する研究で、措置の変更、学校の変更、ソーシャルワークの変更という、養育に関する子どもの経験の3つの側面と、養育を受ける子どもとケアリーバーの主観的幸福と健康を測定する明確な指標(Selwyn & Briheim-Crookall, 2017)の開発を検討している。

2.8 結論

この最近のエビデンスの迅速なレビューから明らかなように、成果と影響の測定に関して、特に具体的な指標の特定との関連では、過去数年であまり変化は見られない。CSCS が達成できる成果の理解は、データの質と有用性によりある程度制限されている。サービスを受ける人の意見と経験を含めることや主観的基準を使うことの重要性への注目は引き続き高まっている。最も基本的で、我々の枠組みの開発を伝えるために特に関連するのは、数多くの文献で強調され、増え続けているエビデンス、つまり、複雑で微妙な CSCS の活動背景と、貧困の増加と子どもの社会的養育の需要の増加の幅広く密接な関係に関するエビデンスである。

3. 調査結果

この章ではまず、我々の概念枠組み、すなわち、CSCS が要支援の子どもの生活にポジティブな変化をもたらす仕組みを提示する。この枠組みは、CSCS のリーダー、スタッフ、そして利用者の意見調査の結果を利用して作成されており、前章で示した研究を大きく反映している。その後、成果の枠組みに含める指標の選択に用いた要件とこれらの指標を測定するために必要なデータの種類を説明する。

3.1 我々の概念枠組み

サービスが意図した影響を与えているかを評価するために、どの成果を測定するかという決定には、これらのサービスから利用者のどのような変化が期待されているか(すなわち、利用者成果)とこれらの変化はどのように達成できるか(すなわち、中間的成果)を定める必要がある。図3は、CSCSが要支援の子どもの生活にポジティブな変化(右端のボックス)をもたらす仕組み(左側の3つのボックス)を説明している。

3.1.1 適切な環境と文化

回答者は、CSCS 利用者に関するポジティブな成果というものは、よいソーシャルワークの実践を支える適切な環境と文化が存在する場合のみ、達成できると強く主張した。政治指導者とシニアマネージャーは、これらの環境を創るうえで重要な役割を担うとみなされている。

前述したとおり、これらの調査結果は、こうした環境を整えることに貢献する組織、実践、スタッフの特徴について、広まりつつある研究基盤を反映している (Beninger & Clay, 2017; Bryant et al., 2016; Canwell, Hannan, Longfils, & Edwards, 2011; Forrester et al., 2013; Kantar Public,

社会的、経済的および文化 的背景 共同コミットメントと CSCS への支援

他機関の役割

リーダーは、よ いソーシャルワ ークの実践を支 える適切な環境 と文化を整える CSCSは、支援を 必要とする子ど もと家族に働き かけ、彼らの権 利を行使するた めの支援を提供 する

子どもと家族を 尊重し、彼らが 必要とする支援 を選択できるよ うな関係性の構 築 要支援児童-安全 に生活できる・ 健康で幸福である・教育面で進 歩し、ポジティ ブな経験をする

スタッフ、子ども、家族の経験から学ぶ

図3: CSCS が要支援児童とその家族の生活にポジティブな変化をもたらす構造

3.1.2 支援を必要とする子どもと家族への働きかけ

研究参加者は、重要な中間的成果はCSCSが以下の点を実践するかどうかであるということに同意した。

- ・ 支援を必要とする子どもと家族に働きかける
- ・ 彼らのニーズを適切に評価する
- ・ 子どもと家族が権利を有するレベルの支援を提供する

前章で詳説したとおり、我々の調査結果は、指針(Ofsted, 2019) および研究文献に反映されている。例えば、Forrester は「(サービスを)必要としている家族を支援しているかどうかが明らかでない限り、子どもの社会的養育の成果を理解することは、ほぼ不可能である。これは部分的には、正確で適切なサービスの対象決定自体が成果であることを意味する。また、我々が達成する成果は、誰を対象とするかで異なるという点でも重要である。ふさわしい介入と(サービスを)必要としている家族を支援しているかという問題を論ぜずに、成果を評価することはできない。」と論じている(Forrester, 2017 p. 12)。

3.1.3 子どもと家族が尊重され、彼らが必要とする支援の選択に参加する

回答者の間では、CSCS が効果的であるためには、子どもとその家族が尊重され、彼らが受けるサービスと支援によってエンパワーされていると感じる必要があるという一致した見解が出された。このことは、国連子どもの権利に関する条約(以下、子どもの権利条約)、1989年の児童法(the Children Act 1989)および2008年の人権法(the Human Rights Act 2008)の精神と一致する。

回答者は、利用者をエンパワーし、その権利を尊重するサービスは、信頼に基づくサービス利用者とスタッフの関係により支えられる必要があると述べた。また、子どもと家族が、彼らのニーズと必要とする支援の選択のプロセスへ、積極的に参加することによって、支えられなければならないと主張した。これらの意見は、効果的なソーシャルワークを支える関係と協働することの重要性を示す研究により支持されている(Care Crisis Review, 2018; Fauth et al., 2010; Forrester et al., 2013; Munro & Hubbard, 2011; Sebba et al., 2017)。

3.1.4 子どもの成果

図3の最初の3つのボックスは、中間的成果を説明しており、これはCSCS が差異をもたらす仕組みである。

しかし、CSCS が機能しているかの最終的基準は(右端のボックス)、要支援の子どもが安全、健康、幸福であることを享受し、確実に自身の潜在能力を発揮するように貢献することである。そのため、CSCS の介入の結果について、以下の点を検討する必要がある。:

- ・ 要支援児童は、彼らが生活する家と地域で安全か?
- ・ 彼らは、健康で幸せに生活し、発達的、身体的、認知的、社会的、精神的な発達段階に達するため の支援を、CSCS から受けているか?
- ・ 教育面で進歩し、ポジティブな教育経験をするための支援を、CSCS から受けているか?

3.1.5 実体験から学ぶ

図 3 の下部の矢印内に示したように、回答者はサービスの計画と提供には、サービス提供者と利用者の意見を聞くことが必要であると考えている。そして、これが効果的なサービスの計画と提供の重要な要素であるというエビデンスは増している(Beninger & Clay, 2017; Fauth et al., 2010; Forrester, 2017; Care Crisis Review, 2018; Kantar Public, 2017; Ofsted, 2015)。後述するとおり、CSCS のスタッフおよび利用者から得たデータは、我々が提案する成果の枠組みの要である。

3.1.6 背景

CSCS の活動は隔絶された環境で行われるわけではなく、要支援児童とその家族に関する成果を評価する際には、家族が生活し、サービスが行われる背景を考慮しなければならない。

研究参加者は、貧困、ホームレス状態、およびその他の不利益な状況は、子育でをより困難な仕事にすると主張した。文献で言及されているとおり、これらの状態を軽減する CSCS の能力には限界があるかもしれない (Bywaters et al., 2016)。さまざまな社会文化的背景を持つ家族は、機関からそれぞれの背景による影響を考慮された異なる対応を受ける可能性があり、人口統計学的、社会的、経済的および文化的背景を分析に含め、この問題を認識し取り組むことが重要である。

さらに回答者は、共同支援のレベルが、主に十分な予算の配分と、部門間で脆弱な子どもへのニーズを 最優先することを通じて、CSCS が効果的に活動するうえで重要な役割を担うと強調した。

この観点は、しばしば CSCS の実績との関連で議会全体の役割を浮き彫りにする、オフステッド監査報告書で十分裏付けられている。

CSCS の支援を必要とする子どもと家族を正確に把握するうえで、他機関の役割はきわめて重要であると指摘されている。さらに、子どもの安全性と健康と幸福はすべての人の関心事項であり、CSCS が効果的なサービス・コーディネーターと権利擁護者でなければならない。一方で、要支援児童に変化を与える支援の多くは、学校、保健機関、早期支援およびその他のチルドレン・サービスが提供するものである。同様に、大人への支援も、親のニーズと要支援児童に否定的な影響を与えうる状況に対応するうえで重要である。

CSCS 外の要素であるため、成果枠組みに含まれていないものについては後述する。しかし、CSCS の成果を分析する際は、これらの外部からの影響についても分析過程で検討することが必須である(4.5 項を参照)。

3.2 成果指標の選択

前項にて、サービスが要支援児童の生活にポジティブな変化をもたらすか、そうであればどのように変化をもたらすかを評価するために、測定されるべき CSCS の中間的成果と子どもに関する成果について論じた。成果が達成されたかを測定するためには、具体的で、観察ができ、測定可能な指標を特定する必要がある。適切な指標を選択する際、我々は MVP 原則⁶を使用した。言い換えると、我々は有意義であり、妥当であり、実用的な基準を選択した。

成果指標は、利害関係者にとって有意義で効果的なものでなければならない。適切な指標を選択する際、我々は、主にプロセスに焦点を当てる現在の国内統計[すなわち、SSDA903 (DfE, 2019) および Cin Census (2018b)]に関し、一般に広がっている批判について検証した。そして、我々はサービスの質と有効性の指標を提供すると考えられる基準を提案した。さらに、可能な限り、子どもと家族の変化および彼らのサービスに関する意見と経験を測定する指標に集中しようと試みた。

利害関係者が、サービスの計画と提供のための情報に使用されたデータを、信頼していることが必須である。我々が適切な指標を選択する際に使用した2つの要件がある。1つは、確実性、すなわち、指標が測定することを意図された内容を測るデータを生成しているということである。もう1つは、信頼性、つまり、基準は一貫した方法で収集されたデータに基づいていなければならないとういうことである。よって、確固としたデータは、これらの要件を満たす標準的なデータの収集方法を必要とする。

最後に、自治体は政府機関が要求するデータ収集のために、既に相当の時間と資源を費やしていることから、我々は自治体への負担を最小限に抑えるよう配慮した。我々は可能な限り、有意義で有効な既存の指標、既存のデータを使用して作成できる指標、および政府機関(例:DfE および子どもコミッショナー事務所(Office for Children's Commissioner))が作成した新しい指標を推奨した。

⁶ MVP 原則は、ベター・スタート・プログラムの評価等、数々のソーシャルポリシー評価を作成するために使用されている。

3.3 異なるタイプのデータ

我々の概念の枠組みで強調された、中間的および最終的成果を測定するためには、4 つのタイプのデータの組み合わせが必要となる(図 4 を参照)。我々は、サービスの有効性を理解し、その影響についての多様な問いへの答えを提供するためには、これら全てのタイプのデータが必要不可欠であると考える。

図4:枠組みに必要な新しいおよび既存のデータ

組織、スタッフおよび実践に
ついてのデータ
サービスについての利用者の観点と経験および自己申告された
影響
サービスについての利用者の観
なと経験および自己申告された
影響

第 1 に、サービスが子どもとその家族の生活にポジティブな変化をもたらすための、適切な環境と文化が存在するかを判断する目的から、組織、そのスタッフおよび最前線での実践に関するデータが必要となる。現在のところ、子どもの社会的養育従事者データに、適切な環境に関する全国基準のデータはわずかしか存在しない。複数の自治体がスタッフアンケートを行っている一方で(4 章を参照)、このデータを収集する標準的な方法はない。我々の枠組みは、スタッフとシニアマネージャーからのデータを収集する、または他の情報源から引き出すための、標準化された手法を開発するために用いる指標を提案している。

第2に、CSCS が支援を必要とする子どもと家族に働きかけているか、彼らのニーズと必要とする介入 が適切に判断されているかを評価するために、特定の期間の子どものコホート群を網羅する(および時間 の経過に伴う傾向を提供する)スナップショットのデータが必要である。スナップショットのデータは、 よいソーシャルワーク実践を支えるうえで重要とみなされるサービスの特徴の観察にも役立つ。我々が 次章で提案したスナップショットの指標のいくつかは、要支援児童調査(the CiN Census, DfE, 2018b)、 SSDA903 データ(2019)または全国生徒データベース(the National Pupil Database, NPD)に含まれて いる。我々はさらに、自治体がすでに収集した情報(例:事例記録および監査)に依存する新しい指標を 複数提案している。しかしながら、事例管理システムからこの情報を抽出する形式と容易度には差があ る。

第3に、サービスに関するCSCS利用者の意見と自己申告された影響に関するデータは、子どもと家族が尊重されエンパワーされていると感じているか、彼らが受ける支援が彼らのニーズを満たし、彼らの権利を尊重し、彼らの生活に変化をもたらしているかを判断するために必要である。CSCSが利用者からフィードバックを集めることが徐々に一般化してきている一方で、通常はサービスが彼らの生活にもたらした変化に関する認識よりも、サービスに関する意見に焦点が当てられている。さらに、この情報を収集する標準化されたツールはなく、我々の枠組みは利用者からデータを収集する標準化された方法を開発するために利用できる、指標セットを含んでいる(4章を参照)。

最後に、CSCS が子どもに関する最終的成果を達成したかを評価するためには、安全性、健康と幸福、および教育に関する、それぞれの子どもの進歩を表す縦断的データが必要となる。子どもの社会的養育を

観察し評価する目的で、これまでに収集されているわずかなエビデンスは、これらのサービスを受けている期間に子どもが進歩するか、そしてどのように進歩するかを示す、縦断的データに依拠する。これは、 縦断的データがポリシーの作成、監視および評価で重要な役割を果たしている、他の子どものポリシーの 分野とは対照的である。

我々は、前述の CSCS 利用者が自己申告した影響を補完するために、既存データ [例: the CiN Census (DfE, 2018b), SSDA903 (DfE, 2019), NPD)]を用いて、標準的な「発達」の指標セットの開発が可能であることを提案する。発達指標の開発は方法論的に困難であるが、DfE は、すでに既存の子どもの社会的養育データベースを用いて、縦断的指標を開発する分析作業プログラムを備えており (DfE, 2018a)、その他にも利用できる優れた研究がある (McGrath-Lone, Dearden, Harron and Gilbert, 2017; Sebba et al., 2015; Ward, Holmes and Soper, 2008)。

4 提案する成果の枠組み

本章の初めでは、我々の概念枠組み(図 3)を説明した、中間的な成果と子どもに関する成果を測定するために必要な指標の組み合わせを概説する。我々の提言は、CSCS のリーダー、スタッフおよび利用者の意見調査と、研究と関連するデータ枠組みとツールの審査に基づく。本章の終わりでは、どのようにデータを理解するか、さまざまな質問に答えるために指標を分析する、いくつかの方法を論じる。

後に提示する成果指標を検討する際は、以下の点に留意することが重要である。

- ・ 我々の枠組みは、CSCS と、要支援児童とその家族に対する CSCS の義務と責任に焦点を当てている。そして、CSCS 利用者のニーズが満たされているか調査するための指標を含んでいる。これらの子どもと家族の生活は、社会的、経済的および文化的影響と他機関が提供するサービス等の要素にも影響を受ける。我々の枠組みは、これらの他の重要な影響の指標を含まないものの、分析においてこれらの影響を検討し調査する方法を提案している(4.5 項を参照)。
- ・ 枠組みに含まれるいずれの指標も、単独で使用されることを意図していない。単独の統計または少数の統計の組み合わせにより、CSCS が活動する複雑な状況と、彼らが我々の社会の最も傷つきやすい子どもと家族に提供する支援を把握することはできない。4.5 項で説明しているとおり、この複雑な状況を把握するには、さまざまなデータソースからの複数の基準を使った、三角法による測定が必要となる。
- ・ この枠組みは、CSCS が提供する支援の、複雑な組み合わせの影響を評価するうえで利用できるデータを改善するために必要な道のりの第一歩である。次の段階では、新しいデータを収集するために必要な手段を開発し、既存データから作成できる基準を試す。これによって、指標を利用できる状態にするための実査が必要となる。この実査は、枠組みを多様な背景(たとえば、自治体の規模、地理的および社会経済的特徴に関連する)で試用するために、少数の自治体において実施するといいだろう。該当する項では、試験段階で検討が必要な問題の種類を指摘する。

4.1 適切な環境と文化を測定する

本項と図 2 では、良いソーシャルワーク実践を支える適切な環境と文化(図 3 の左端のボックス)が存在するか評価するために、どの成果指標を測定すべきか検討する。提案された指標のうち、ごく少数が現在全国データベースで利用可能である(これらはオレンジ色で表示される)。よって、図 2 の指標の大半を収集するために、スタッフへのアンケートが必要となる。

試験段階で検討が必要な内容

- ・ 近年、適切な環境と文化を測定するための、多数のツールが開発された。我々は、これらのツールのいくつか、またはツールが公的に利用可能ではない場所での、開発に関連する文献をレビューした。これには、地域ケア・ソーシャルワーカー保持リスクツール(the Community Care's Social Worker Retention Risk Tool)、DfE ソーシャルワークスタッフ調査(the DfE Social Work Workforce Survey)、LGA ソーシャルワーク健康診断調査(the LGA Social Work Health Check Survey)、ソーシャルワーク組織診断ツール(the Social Work Organisational Resilience Diagnostic Tool)(開発途中)が含まれる。これらのツールと図2の提言には、かなり重複する点があることは明白である。現時点では、図2の我々が提案する指標と、異なるツールで使用された基準の信頼性と妥当性に関する利用可能なエビデンスを深く検討するために、こうしたさまざまなツールが関連する指標を併せて用いることができる。
- ・ 我々は、1年ごとのスタッフ・アンケートの実施を提案する。試験では、例えばオフステッドで 低評価を受けたこと、または内部再編性を理由に、スタッフが特に負担を感じている時期にアン ケートを行うことが適切かどうかということとその影響を考慮する必要がある。
- ・ 我々は、シニアマネージャーから最前線スタッフを含む、全てのレベルのスタッフから、データ を収集することを提案する。
- ・ (スタッフ全員ではなくむしろ) CSCS スタッフの代表標本からデータを収集することが可能である。試験段階では、信頼区間および必要な下位グループの分析の種類等の、分析要件を考慮する必要がある。
- ・ 試験段階では、スタッフが実習の目的(たとえば、全てのスタッフが、良い仕事ができる環境で働けることを保証するため)を理解し、結果の利用目的を明確にするために、スタッフに対しどのようにデータ収集課題を説明するかも検討する必要がある。

表2では以下のことを提示する。

- ・ 提案される成果 (第1欄) :組織、スタッフおよびソーシャルワーク実践の、どの特徴を測定すべきか?
- ・ 指標(第2欄):どのようにこれらの特徴を測定すべきか?
- ・ 妥当性(第3欄):なぜエビデンスは、これらの成果を測定すべきと示唆しているのか?

表 2:組織、スタッフおよびソーシャルワーク実践の成果

成果	指標	妥当性	
	議会の CSCS へのコミットメントの程度に関する観点 ⁷		
1. 効果的なリーダーシップ	CSCS が明確な戦略的優先順位を持っていることに関する観点	リーダーシップは、サービスの効	
リーダーシップ	CSCS のリーダーが最前線のスタッフと直接関わる程度に関する観点	果的な計画と提供の要点である 	
	サービスを支える価値を定める声明書があるか	A A THE RELL LIFE OF THE LIFE	
2. ソーシャルワーク		社会正義の原則と人権の尊重は、	
の価値と倫理へのコミ	声明書がある場合、	要支援児童とその家族を支援す	
ットメント	1) 価値がどのように作用するか	るうえで、必要不可欠な要点であ	
	2) スタッフはこれらの価値をどの程度、日常の実践に適用できるか	<u>る</u>	
	組織が振り返り学習をサポートする程度に関する意見	効果的なサービスは、「責任」を	
3. 振り返り学	利用者のフィードバックが、以下の点で、どの程度情報を提供しているか	問わない形で、スタッフと利用者	
習をサポートする文化	に関する観点	の経験から学ぶ機会を作る必要	
	サービスの計画	がある	
	ソーシャルワークの実践		
	パートナー機関の代表者は、以下の多機関の会議に定期的に出席する		
	1) 戦略会議	サービスの調整は、効果的なサー	
4. 効果的な	2) 運営会議	ビスの提供と子どもと家族のポ	
多機関協働	効果的な多機関の協働が存在する程度に関する観点	ジティブな経験を確実にするた めに必要である	
	効果的な多機関の協働を支える、または損なう要素に関する観点	WICELY CONS	
	スタッフが以下の点に十分にアクセスできる程度		
	・ 支援を行う子どもと家族に関する情報	十分な支援基盤は、スタッフが役	
5. 十分な支援基盤	・ この情報への能率的なアクセスを可能にする事例管理システム	立つ働きができるかどうかに重	
	・ これらのシステムを効果的に利用するためのトレーニング	要な影響を及ぼす	
	物質的労働環境が適切かに関する観点		
	実践を支える枠組みが存在するか、存在する場合は、スタッフはどの程度		
	それを利用できるか		
	実践のための情報提供にどの程度エビデンスが使用されているか		
	スタッフが、関係のある家族および友人の全員とどの程度関わることがで		
6. 良い実践とは、どの	きるか	これらの指標は	
ようなものかについて	子どもとその親/養育者が、自らが受ける支援の決定においてどの程度有	要支援児童とその家族に関する、	
の共通理解	意義な役割を果たしているか	ポジティブな成果を支える良い 実践の特徴を反映している	
	スタッフが、子どもとその親/養育者と、信頼に基づく関係をどの程度築	天成の有似を反映している	
	けるか		
	スタッフが、アセスメント等の重要なプロセスの意思決定において、適切]	
	な自律性を持っている程度		
7. すべてのレベルにお	前年のさまざまな地位のスタッフの回転率と空席率	全てのレベルにおける人員の安	

ける安定した人員	前年のさまざまな地位のスタッフの勤務期間	定性は サービスの有効性への重	
	前年のソーシャルワーク機関スタッフの利用程度	要な影響があるとみなされてい	
	刊 中ツノ マイルノ ノ (成例パブラブ の作) 加 往及	る	
	仕事の異なる面に関する満足		
	例:子どもと十分な時間を過ごすことができる、介入により子どもに関す		
	る成果が改善された		
8. やる気のあるスタッ	スタッフが雇用主から尊重されていると感じる程度	やる気のあるスタッフは、サート	
フ	スタッフが十分な監督を受けているか	スが有効であるために、重要な影響をもつ	
	スタッフが十分な研修と成長の機会を与えられているか		
	仕事量がどの程度、処理可能か		
	前年の異なる地位のスタッフの発病率		
	報告された自分のスキルの適切性 ⁸		
	1) 同僚		
	2) 中堅マネージャー	全てのレベルのスタッフが、自分 の仕事をよくこなし、また自分の 能力に自信を持つためのスキル	
9. 適切なスキルを持っ	上記の人たちのスキルの適切性に関する観点		
た人材	1) チーム		
	2) 部署内	を持つ必要がある	
	上記のスキルの組み合わせの適切性に関する観点		

⁷ スタッフの意見を問うこれらの指標は、例えばスタッフがどの程度、声明書に同意するか、またはしないかを示す尺度 を伴う、声明書形式になると思われる。

⁸ 試験段階では、この指標と次の指標の作成には、政府の全国アセスメントおよび認定システム(NAAS)の発表に関する進捗を考慮する必要がある。

4.2 支援を必要とする子どもと家族への働きかけ

本項と図3では、CSCS が支援を必要とする子どもと家族に働きかけているか、彼らのニーズと彼らが必要とし、受ける権利がある支援のレベルを適切に評価しているかを測定する方法を概説する(図3の左から2番目のボックス)。

表3では、以下の点を説明する:

- ・ 第1欄:組み合わせることにより、CSCS がその支援を必要とする子どもと家族に働きかけているか、彼らのニーズの適切なアセスメントと異なる段階で必要とされるレベルの関与を行っているか、を理解するのに役立つ「サービス」の成果。
- ・ 第2欄: これらのサービスの成果を測定するために必要な指標。いくつかは、すでに利用可能なデータ (例えば、既存の子どもの社会的養育データセットまたは事例ファイル)を使用により、開発可能な、子どもと家族が必要とする対応の種類についての決定に関するスナップショットデータに基づいている。我々はさらに、各子どもの社会的養育の過程を示す縦断的基準を提案した。縦断的指標は、最近の DfE の研究 (DfE, 2018a)で説明されているとおり、既存の子どもの社会的養育データセットを使用して作成できる。
- ・ 第3欄:どの CSCS 利用者のグループが、さまざまな成果指標で網羅されているか?
- ・ 第4欄:妥当性。すなわち、エビデンスがこれらの成果を測定すべきと示唆する理由。

重要な点ではあるのだが、表 3 に含まれていない成果の 1 つは、満たされていないニーズである。すなわち、1989 年の児童法(the Children Act 1989)の要支援児童の定義を満たしているが CSCS の支援を受けていない子どもに関連している。我々は関連する指標を特定することができなかったが、これについて、試験段階で再度取り上げ、適切な基準の特定を試みるべき、重要な問題であると考える。

表3:支援を必要とする子どもと家族に働きかける

成果	指標	網羅されるグループ	妥当性
1. 連携する機関が 支援を必要とする 子どもを見分ける ことができる	紹介®された子どもが、 サービスを受ける子ども になった(すなわち、 要支援児童となった)率 紹介された子どもが、 それ以上の対応を受けな かった率(NFA) 他機関が行った紹介の成果	前年 CSCS に 紹介された子ども	他機関による紹介が、サービスを受ける 子どもにつながる率が高いことは、紹介さ れることの関値についての良い理解と効果 的な早期支援を示す 他機関による紹介の分析は関値がより明確、 または明確でない点を際立たせる可能性が ある
サービスを受け2. 要支援児童の効果的な特定以前要支援児童	サービスを受けなかった 子どもの再紹介率 以前要支援児童プランの 対象であった子どもの再紹介率		これらの指標の時間による変化は、危害の リスクにさらされている、または支援を必
3. 危害のリスクに さらされている 子どもの効果的な特定	S47 調査で、プランの対象にならない子どもの率以前児童保護プランの対象であった子どもが、再度 S47 調査を受ける率再度児童保護プランの	前年 S47 調査の対象となった子ども 前年児童保護プラン	要としている 子ども (例:障害児、若い養育者)を、サー ビスが効果的に特定し、必要に応じて追加 支援を行う、または支援を縮小しているこ とを示す
4. 家庭で安全に 養育されない子どもの 果的な特定	対象となる子どもの率 予定外の養育受け入れが 行われた子どもの率 再養育受け入れが行われ た子どもの率	の対象となった子ども 前年の 社会的養育児童数	養育の開始は、子どものトラウマを 最小化するよう計画しなければならない。 すでに CSCS が交流している子どもの 予定外の受け入れ、または再受け入れは アセスメントまたは介入の弱点を示してい る可能性がある
5.子どものニーズに合った適切な支援	同様なプランに留まった 子どもの率 プランを縮小した後、 ニーズが満たされていな い様子が再び見られなか った子どもの率 プランを縮小した後、 ニーズが満たされていな い様子が見られ、新しい プランが必要となった 子どもの率 プランが拡大され、最初 の審査で確認された子どもの率 プランが拡大された後、 縮小された子どもの率	前年の全ての要支援児童、または、要保護児童、または、社会的養護児童	サービスは、関与の拡大、または、必要がなくなった場合には縮小も含め、子どもの ニーズのレベルの変化に対応しなければな らない

6. ケアリーバーが継続して共同親の支援を受ける

養育を離れた後の自治体 サービスとの交流パターン¹⁰

前年のケアリーバー

ケアリーバーに関するポジティブな成果の 可能性は、彼らが CSCS および他の機関から 継続して支援を受ける場合に高くなる

 9 紹介の定義は、機関により異なるため、ほかの機関との比較は同じ「玄関ドア」システムを採用している場合のみ妥当である。

¹⁰ ケアリーバーとサービスの交流の指標が現在存在する一方で、データの質が乏しいとの忠告を受けている。よって、 試験段階でこの指標を改善する方法を検討すべきである。CHECKING FOR BATCH 3 ENDS HERE

4.3 子どもと家族が尊重され参加する

本項と表 4 では、図 3 の (左から) 3 番目のボックスで概説された内容を測定する方法を概説する。すなわち、子どもと家族が:

- ・ スタッフとの間に信頼に基づく協力関係を築く
- 尊重され、サービスによりエンパワーされていると感じる
- ・ サービスが、自身の公平なプロセスを受ける権利を尊重していると感じる
- ・ 自身のニーズと彼らにとってどの支援が役に立つかを特定することに、積極的に関わる

表 4 は、以下の点を提示する:

- ・ 子どもと家族の CSCS の経験、ならびに彼らが受けた支援についての意見を示す成果 (第1欄)
- ・ これらの成果を評価するために必要な指標(第2欄)。これらの指標は、自治体がすでに収集した スナップショットデータと、サービスについての子どもと家族の意見と経験に関する新しいデータ の組み合わせに依拠する。

試験段階で検討する必要のある事項

- ・ 我々は、CSCS の支援を受けるすべての子ども(すなわち、要支援児童、要保護児童、社会的養護児童、およびケアリーバー)について、表 4 の成果を測定することを提案する。しかし、実査ではデータ収集の課題に(利用者全員ではなくむしろ)代表標本を使用できるか検討する。
- ・ 我々は、データを毎年収集することを提案する。実査では、毎年の課題に必要な資源が明確になった時点で、これが実現可能か検討する必要がある。
- ・ 網羅される問題の繊細さ、および利用者のサービスへの参加のきっかけとなった状況 (特に参加が任意によるものでなかった場合)を踏まえ、方法論的および倫理的に確固とした、データ収集 方法を開発する必要がある。
- ・ 実査では、回答の偏りを最小限にするための統計学的技術を検討する必要がある(例:最も不当な扱いを受けたと感じている人は、自分の意見を提供したいと思う可能性が高いことが考えられる)。

表4:子どもと家族が尊重され参加する

成果	指標	網羅されるグループ	妥当性
1. 子どもがスタッフを	ソーシャルワーカーを変更した子ども	前年の要支援児童、	ソーシャルワークの安定性は信頼と協力
信頼しており、安定し	の率	要保護児童、社会的	的な関係を築くために必要である
た協力的な関係を築い	ソーシャルワーカー/重要なスタッフ	養護児童	信頼に基づく協力的な関係は、回復力を促
ている	との関係についての子どもの意見。例		進し、サービスおよび/または支援へのよ
	えば、信頼に基づいている、協力的、エ		り積極的な参加と関連している
	ンパワーしてくれる		
	ソーシャルワーカー/重要なスタッフ		
	とのコミュニケーションが、どの程度		
	開放的で正直であったかについての子		
	どもの意見		
2. 親/養育者がスタッ	ソーシャルワーカー/重要なスタッフ		
フを信頼しており、安	との関係についての、親/養育者の意		
定した協力的な関係を	見。例えば、信頼に基づいている、協力		
築いている	的、エンパワーしてくれる		
	ソーシャルワーカー/重要なスタッフ		
	とのコミュニケーションが、どの程度		
	開放的で正直であったかについての親		
	/養育者の意見		
3. 子どもが自らのニー	子どもが、どの程度、以下の特定に関与		利用者のアセスメントおよび計画への積
ズの特定と支援の計画	したかについての子どもの意見		極的参加は、支援へのより積極的な参加、
に関与している	1) 彼ら自身のニーズ		および支援が彼らのニーズに合っている
	2) 彼ら自身が必要な支援		とみなされることと関連性がある
	彼ら自身の支援計画を立てる会議に出		エンパワメントされる感覚もまたそれ自
	席した子どもの率		体が重要な成果であり、回復力を促進する
4. 親/養育者が自らの	親/養育者がどの程度以下の特定に関		
ニーズの特定と支援の	与したかについての彼らの意見		子どもと家族は、彼ら自身に影響を与える
計画に関与している	1)ニーズ		決定に、参加する権利がある
	2) 彼ら自身と子どもが必要な支援		
	彼らの支援を計画を立てる会議に出席		
	した親/養育者の率		
5. 子どもが、自らのニ	彼らが必要とする支援を得るために、		利用者の意見と苦情のレベルの組み
ーズに合ったサービス	ソーシャルワーカーが他のサービスと		合わせは、支援が子どもとその家族
であると考えている	共同して働いたかについての子どもの		のニーズに合っているかを理解する
	意見		
	子どもからの裏付けのある苦情の率		うえで役立つ
	子どもからの繰り返す苦情の率		

6. 親/養育者が、自ら	彼らが必要とする支援を得るために、	子どもと家族は苦情を申し立て、そ
のニーズに合ったサー	ソーシャルワーカーが他のサービスと	の苦情に関する適切な調査を求め
ビスであると考えてい	共同して働いたかについての親/養育	る権利を有する
る	者の意見	
	親/養育者からの裏付けのある苦情の	
	率	
	親/養育者からの繰り返す苦情の率	

4.4 子どもの成果

この項では、子どもへの成果、すなわち CSCS の関与の結果として、彼らの生活で何が変化したかに焦点を当てる。

- ・ 要支援児童は、生活の場である家と彼らの地域の両方において安全か?
- ・ 健康で幸福であり、発達的、身体的、認識上および精神的発達段階に達するための支援を CSCS から 受けているか?
- ・ 教育面で進歩を遂げ、ポジティブな教育経験をするための支援を CSCS から受けているか?

表5は以下の点を含む:

- ・ 子どもの成果 (第1欄): CSCS の介入によって、子どもの生活の領域への影響がどう異なるか
- ・ これらの子どもに関する成果を測定するために必要な指標(第2欄):いくつかの指標は、複数の成果を測定するために(他の指標と組み合わせて)用いることができる。これは、以下の2つのことを反映する。すなわち、子どもの経験が相互に結び付いていること、そして子どもの生活の複数の面でこれらの経験の影響があることである。

前出の指標と同様に、子どもの成果の指標は、以下のデータの組み合わせに依拠する。

- ・ 特定の時期および時間の経過に伴う、子どものコホート群に関する成果を測定するための、既存の データソース(たとえば、既存の子どもの社会的養育データセットまたは事例ファイル)からのス ナップショットデータ。
- ・ CSCS が関与した後、時間の経過に伴い子どもに関する成果が変化するか、またどのように変化するかを表す縦断的データ。これらの指標も、既存のデータソースから作成することができる。
- ・ 前項で考察した、子どもと家族が受けた支援の影響に関する、彼らの認識についての、子どもと家 族から収集したデータ。

戦略的および運営上の目的に、これらの成果指標およびその組み合わせを用いる方法については、枠組みで推奨される基準を開発、および使用した経験についての、参加自治体からのフィードバックを踏まえて、**試験段階**での調査が必要である。調査が必要となるさらなる検討事項は、サービスを通じての推移を追うための各事例レベルでの分析、および子どものさまざまなグループの集合的分析を加えることである。

表 5:子どもに関する成果

成果	指標	網羅されるグループ	妥当性
1. 子どもが生活	過去6ヶ月間に、家または措置から失踪した子どもの率11	前年の要支援児童、要	支援が機能している場
の場において安	過去 6 ヶ月の失踪回数がそれ以前の 6 ヶ月と比較して多い	保護児童、社会的養護	合、子どもが自宅にい
全である	または少ない子どもの率	児童	るか、養育を受けてい
	過去 6 ヶ月間にドメスティックバイオレンスの影響を受け		るかに関わらず、これ
	た子どもの率		らのリスクは減少する
	過去6ヶ月間に、それ以前の6ヶ月と比較して、ドメスティ		はずである
	ックバイオレンスの影響を受けた可能性が高い、または低い		
	子どもの率		
	過去6ヶ月間に、親の精神疾患の影響を受けた子どもの率		
	過去6ヶ月の間に、それ以前の6ヶ月と比較して、親の精神		
	疾患の影響を受けた可能性が高い、または低い子どもの率		
	過去6ヶ月間に、親の薬物乱用の影響を受けた子どもの率		
	過去6ヶ月間に、それ以前の6ヶ月と比較して、親の薬物乱		
	用の影響を受けた可能性が高い、または低い子どもの率		
	子どもが家または措置においてどの程度安全で支えられて		
	いると感じているか		
2. 子どもが彼ら	過去6ヶ月間に、犯罪的または性的搾取、人身売買の影響を		
の地域において	受けた子どもの率		
安全である	過去6ヶ月間に、それ以前の6ヶ月と比較して、犯罪的また		
	は性的搾取、人身売買の影響を受けた可能性が高い、または		
	低い子どもの率		
	子どもが彼らの地域において、どの程度安全と感じているか		
3. ケアリーバー	過去6ヶ月間に、適した居住場所で生活していた率	前年、ケアリーバーだ	適した、安定した居住
が安全である	過去6ヶ月の状況が、下記にあてはまるケアリーバーの率	った若者	場所はリスクの軽減を
	- 不適切な居住場所から、適切な居住場所に引っ越した		促す
	- 適切な居住場所から、不適切な居住場所へ引っ越しした		
	- 適切な居住場所に留まった		
	-不適切な居住場所に留まった		

4. 子どもが生活	子どもの SDQ ¹² 行動得点の変化	前年の要支援児童、要	行き詰った、破壊的お
の場に馴染んで	過去6ヶ月間とそれ以前の6ヶ月間に、少年司法制度の対象	保護児童、社会的養護	よび危険な行動の減少
おり幸せである	週五 0 7 万 間 こ これ 2 5 日 の 2 7 万 間 に、 ラ 千 日 仏 間 及 い 列 家 と なった 子 ど も の 率 の 比 較	児童	は、子どもが安定して
40 y # E C W 0	過去 6 か月間とそれ以前の 6 か月間に、薬物乱用に関わっ	儿里	幸福であることを示
			す。この情報は、子ども
	た、子どもの率の比		が生活の場において、
	過去6か月間とそれ以前の6か月間に、自傷行為を行った可		どう感じているかにつ
	能性が高い、または低い子どもの率の比		- /
	子どもが家または措置先において、安定して、愛され、面倒		いての彼らの認識と共
	を見てもらっていると感じている程度		に、三角法で測定され
	子どもが今後の養育計画を理解していると報告している		る
	程度		
5. 安定性、	子どもの支援計画が	前年の要支援児童、要	成長のためには、子ど
および永続性	1) 過去6か月間に更新された	保護児童	もは落ち着いて帰属意
の達成	2) 変更が認められていない		識を持つ必要がある
	ことを確認した事例監査の率		
	家庭で満たされていない子どものニーズのエビデンスがあ		
	ることを確認した事例監査の率		
	社会的養護児童となってから2年以内に、幼年期を通しての	前年の社会的養護児童	混乱した措置と永続性
	長期的養育計画がある、またはない子どもの率		の達成の失敗は、乏し
	過去6か月間に、予定外の措置の変更があった子どもの率		い養育計画を示してい
	過去6か月間に、永続的な養育先への移動が成功、または失		る可能性がある
	敗した子どもの率		
	永続性の達成のために、何が行われているかについての子ど		
	もの意見		
	永続性の達成のために、何が行われているかについての親		
	養育者の意見		
	子どもが		交流に関する子どもと
	1) 家族との交流計画について明確に理解している		家族の希望と気持ちを
	2) 彼らの希望が考慮されていると感じている		聞く必要がある
	親/養育者が		
	1) 子どもとの交流計画について明確に理解している		子どもが自身の置かれ
	2) 彼らの希望が考慮されていると感じている		ている状況を理解する
	, 200		ために、交流計画につ
			いて理解する必要があ
			る
6. 行動的および	子どもの SDQ 得点の変化	前年の要支援児童、要	支援が機能している場
情緒的発達	- 情緒的発達	保護児童、社会的養護	合、各子どもの SDQ 得点
111101147000	- 品行上の問題	児童	は改善するはずである
	- 多動性	, , <u>, , , , , , , , , , , , , , , , , </u>	
	Ø 39/1L		

7 九人4470年	フドナの CDO 祖長の本仏	
7. 社会的発達	子どもの SDQ 得点の変化	
	一种間関係	
	- 向社会的行動(すなわち、積極的、協力的、および社会的	
	受容をと友好関係の促進を意図している)	
8.メンタルヘル	過去6か月間に、満たされていないメンタルヘルス上のニー	要支援の子どもは、メ
ス	ズが特定された子どもの率	ンタルヘルス上の問題
	過去6か月間に、満たされていないメンタルヘルス上のニー	を抱える危険性が高
	ズが特定され、CAMHS ¹³ または同等の支援を受けている子ども	く、これらの問題を特
	の率	定し、対応する必要が
	子どもについての親/養育者による以下の意見	ある
	1) 彼ら(子ども)自身のアイデンティティについてのポジ	
	ティブな感覚	
	2) 将来への希望について	
9. 子どもが早期	過去6か月間に、早期教育に参加した2歳から4歳の子ども	早期教育はポジティブ
教育に参加する	の率	な発達的な成果と関連
		性がある
10. 子どもが教	過去6か月間に、永続的にまたは一定期間、除外された子ど	子どもは教育を受ける
育に参加する	もの率	権利を有し、教育への
	過去6か月間に、無許可の欠席があった子どもの率	参加は、教育での様々
	過去6か月間に、それ以前の6ヶ月と比較して、永続的に、	なポジティブな成果お
	または一定期間、除外された可能性が高い、または低い子ど	よび健康で幸せである
	もの率	ことと関連性がある
	過去6か月間に、それ以前の6ヶ月と比較して、無許可の欠	
	席があった可能性が高い、または低い子どもの率	
11. 子どもが安	過去6か月間に、中等教育の学校を変更した子どもの率	安定性はポジティブな
定した、ポジテ	過去6か月間に、それ以前の6ヶ月と比較して、中等教育の	教育成果および子ども
ィブな教育体験	学校を変更した回数が多い、または少ない子どもの率	が落ち着くための支援
を得る		と関連性がある
	子どもの学校または大学での体験	子どもが彼ら自身
	子どもが好きな、その他の活動への参加	の教育と課外活動
		についてポジティ
		ブな場合、彼らが
		自信を持ち、教育
		面で潜在能力を発
		揮する可能性が高
		くなる

12. 子どもが教	キーステージの結果 (Key Stage results) における各子ど		教育における進歩と子
育において進歩	もの進歩		どもの希望は、子ども
する	将来に関する子どもの希望		のより幅広いニーズが
	教育を受けている、就職している、または訓練 (EET) を受	前年、ケアリーバーだ	満たされており、その
	けているケアリーバーの率	った若者	結果彼らが教育の恩恵
	各ケアリーバーの EET 資格の変更		を受けているかを理解
			するうえで役立つ

 $^{^{11}}$ 我々は、審査周期に関するよい慣習(すなわち、子どものニーズは最低でも6ヶ月ごとに審査されなければならない)を反映し、子どもに関する成果の大半について6ヶ月の参照期間を提案した。しかし、この参照期間の実現可能性と有用性については、試験段階で検討する必要がある。

4.5 データを理解する

正しい成果指標があることが重要であると同時に、さまざまな質問に答えるためにこれらの指標をどのように分析するか、および地域状況の背景を考慮することも同等に大切である。前項で論じた指標の分析においては、CSCS の運営に影響を与える可能性がある外部からの影響と要支援児童に関する成果に影響を与える可能性がある (CSCS 以外の)要素の、相互作用も検討する必要がある。

この項では、我々が提案する枠組みを用いて行う、分析の範囲を提示する。

4.5.1 三角法による測定

単独のデータ項目または少数の統計の組み合わせにより、CSCS が提供する支援の複雑さを把握することはできない。そのため、CSCS が上手くいっていることとそうでないこと、またそれらが子どもと家族に与える影響を理解するには、複数の測定基準が必要である。前述のとおり、成果を評価するためには、多くの場合、複雑な経験とニーズを把握できる指標の組み合わせが必要となる。例えば、子どもが落ち着いており幸福であることを確認するためには、我々は破壊的で危険な行動の減少が見られることを予測し、さらに自らが幸せであり落ち着いているかについての、子どもの認識を調査する。

複数の指標の成果に加え、三角法による他の方法でデータを測定することができる。

例:

- ・ CSCS のための共同支援に関する意見は、適切な組織環境と文化に関する結果を説明するうえで役立 つ。例えば、共同支援に関するポジティブな意見は、仕事を適切にこなすための支援と基盤がある というスタッフの報告におけるポジティブな意見と、関連性があることが予測される。
- ・ サービスに関する利用者の意見は、適切な組織環境と文化の指標の調査結果と比較することができる。利用者からの否定的なフィードバックは、スタッフが十分な支援を受けられず、やる気を失っ

 $^{^{12}}$ 監訳者注: SDQ とは、STRENGTH AND DIFFICULTIES QUESTIONNAIRE の略語であり、子どもの情緒や行動についての 25 の質問項目を親または学校教師が回答するアンケートである。子どものメンタルヘルス全般をカバーするスクリーニング尺度として、ロバート・グッドマン博士によって英国で開発され、現在、世界各国で広く用いられている。

¹³ 監訳者注: CAMHS とは、Child and Adolescent Mental Health Services の略語であり、子どもと思春期のメンタルへルスサービスのことである。

ていることを示している可能性があり、反対に労働環境とスタッフの士気を改善する努力は、利用者からのよりポジティブなフィードバックに反映されるはずである。

・ よい実践の指標(たとえば、スタッフが実践に必要な情報のためにエビデンスを用いる、ツールと 家族全体を支援するための実践モデルを用いる)は、支援が利用者のニーズを満たしているという 利用者の意見、および子どもに関する成果の改善(たとえば、リスクの低下、子どもが学校でより よく過ごし幸せである)に反映されるはずである。

4.5.2 他機関の役割

他機関の支援と影響の測定は、我々の研究の範囲外であるため、我々の枠組みは CSCS の成果に焦点を 当て、他機関の役割を直接測定することは試みてはいない。

しかし、我々が提案した指標の多くは、他機関の役割についての重要な問いを提示する上で役立つ。 例えば、効果的な機関間協働に関する CSCS スタッフと利用者からのポジティブな意見は、主に他機関 による子どもに関するポジティブな成果 (たとえば、安定したポジティブな教育体験、ケアリーバーに適した居住場所、早期教育への参加) につながるはずである。反対に、学校からの除外、および学校での否定的な経験について報告する子どもの増加は、学校が要支援児童の支援にさらに取り組む必要性を明らかにしている可能性がある。家庭環境に関わるリスク (たとえば、ドメスティックバイオレンスに晒されている、親の薬物乱用)を軽減できないことは、大人へのサービスに欠落があることを明らかにしている可能性がある。地域におけるリスク (たとえば、性的および犯罪的搾取)の軽減は、警察との効果的な協働を示している可能性がある。

4.5.3 CSCS の資金

2章で概説したとおり、CSCS を圧迫する緊縮経済と子どもの社会的養育予算の削減が続く中、CSCS の需要が増加していることを示すエビデンスが増えている(Thomas, 2018; Kelly, Lee, Sibieta and Waters, 2018)。さらに、子どもコミッショナーによる最近の報告(Stanford & Lennon, 2019)は、予算が圧迫されていることを浮き彫りにし、その一部は子どもとその家族への法定前サービスの削減に起因すると述べている。自治体の支出は年ごとに報告され、報告のために定義された分類に従い、社会的養護児童へのサービス、児童保護および安全保障/家族支援に分類される14。

過去の研究では、子どもの社会的養育の支出に関するデータが、限られていることが強調されている(Beecham & Sinclair, 2007; Holmes & McDermid, 2012; Ward et al., 2008)。支出申告書は、支出額を、サービスを受ける子ども(および家族)の数で割った場合、非常に具体的な目的のためのデータを提供し、すべてをカバーする単価の見積もりが可能となる。しかし、これでは、この報告書を通して述べてきた CSCS の複雑さと微妙さのレベルを十分に認識することはできない。組織の財務データおよびシステムのさらなる限界とは、それらが子どもと家族のデータと紐づけられていないことが度々あることである。 成果の枠組みのテストでは、CSCS のサービスと支援の価値を理解することを促すために、支出と予算に関する情報を含めることと、それらを子どもと家族のニーズと成果に関するデータに関連づける方法の検討が必要である。

4.5.4 社会的、経済的、人口統計学的および文化的要素

前述のとおり、貧困、貧しい住宅、非常に恵まれない地域で生活していること等が及ぼす重要な影響は、子どもの生活を左右する。従って、我々が提案した子どもの成果の多くはこれらの要素と比較して測定されるべきである。既存のデータ(例: CiN 調査および 903 データ)とすべての新しいデータを、子どもの郵便番号と紐づけた場合、分析においてこれらの影響を検討する効果的な方法が提供できる(たとえば、欠乏レベルがさまざまな地域の要支援児童に関する成果の違い)。

人口統計学的、文化的およびアイデンティティに関する要素は、CSCS の子どもに関する成果および子どもの CSCS での経験が、多様な変化を生じさせることを意味する可能性が高い。我々が枠組みで提案した成果は、全国行政データセット(the national administrative datasets)に含まれる年齢、ジェンダー、人種および全国生徒データベース(the National Pupil database)に含まれる特殊教育のニーズ等その多くがすでに存在している、人口統計学的データを含めて分析する必要がある。

試験段階では、これらの変数を分析で使用することの実現可能性を検討し、さらなる人口統計学的データが必要か判断することができる。

¹⁴ アプレンティスシップ・スキル・子ども・学習法 (Apprenticeships, Skills, Children and Learning Act) (2009) の 251 項は、教育と社会的養育に関する予算額と実際の支出額の計算書の提出を、自治体に義務付けている。

4.5.5 異なるニーズを持つ子どもと、異なるサービスの提供

我々の目的は、要支援児童の多様なグループ全てを把握できる、包括的成果枠組みの開発であった。包括的な統計的エビデンスが役に立つ一方で、さまざまなサービスの計画および提供のためには、様々なグループの個別分析も必要となる。例えば、障害児、児童保護プランの対象となっている児童、社会的養護児童およびケアリーバーについて、グループ別の成果分析を行うことが考えられる。その後、これらのさまざまなグループの成果を、担当チームのスタッフおよび実践の指標と関連づけることができる。

4.5.6 基準設定

この研究のエビデンスは、自治体間での成果データの比較が強く求められていることを示している。他 の子どものポリシーの分野では通常、子どもに関するよい成果とはどのようなものかについての、広範な 全国エビデンスに基づき、サービスを計画することができる。

しかし、要支援児童についてはそのようなデータはなく、CSCS は彼らの関与が機能した場合、どのような改善が期待されるのか理解するために、主にお互い、またはオフステッドに頼っている。

自治体間での比較は、CSCS の需要を生み、要支援児童に関する成果に影響を与えるその他の外的要因を、分析においてコントロールした場合、より強固になる。例えば、我々は、標準的な社会経済的指標(たとえば、多数の同伴者のいない 18 歳以下の難民申請者、CSCS の支援を必要とする可能性の高い家族の流入率が平均よりも高くなる住宅政策)で把握できない同様の困難に直面している、統計学的な近接値および機関の比較分析を提案する。

4.5.7 実績向上の支援

我々の枠組みは、改善の過程にある自治体間の進捗を観察するうえで貴重である。我々が提案した指標の幅は、自治体が要改善と特定した分野での進捗を観察することを可能にする。我々が提案した指標の幅は、自治体が改善過程のさまざまな段階で、実践を評価することも可能にする。例えば、初期段階では表2で示した、適切な組織環境と文化に関する指標の改善が予想される。だが一方で、表5で示した子どもに関する成果の改善にはかなりの時間を必要とする。同様の過程の段階にある他の自治体との比較、または先を行く自治体の推移を見ることが、自治体にとって有用かもしれない。

改善過程は、改善活動が行われているという文脈に沿って考慮すべき、統計的異常をもたらす可能性がある。たとえば、プランの縮小は通常ポジティブな成果とみなされる。しかし、最近になってアセスメントの質を改善した自治体では、より高いレベルの支援を必要とする子どもを特定する能力が上がるにつれ、児童保護プランの対象となる子ども、または養育対象となる子どもの増加が見られるかもしれない。同様に、低い離職率は通常望ましいとみなされるが、実践の改善に異なるスキルを持つスタッフが必要な場合、離職率の(一時的な)増加をもたらす。

5 結論

我々の研究により、サービスの計画と提供について十分な情報に基づく意思決定を行うためには、CSCS にはより良いエビデンスが必要であるとの一致した見解があることが判明した。資源が減少している時に CSCS の需要が増えていることによる負担の増加は、財政的圧力からデータチームが縮小される中で、自治体が支援の有効性に関するより優れた知見を必要としていることを意味する。

多数の自治体が、すでに収集したデータから、より統計的でソフトなエビデンスを生成し分析するためのさまざまな方法を試している。これらの自治体はさらに、新しいエビデンス、特にスタッフから組織の健全性を評価するデータ、そして CSCS 利用者からサービスに関する意見と経験についてのデータを収集するために、幅広いツールを用いている。

これらの活動は、幅広い有用な情報を提供することができる。しかし、断片的であることから、全体像を捉え、サービスのさまざまな側面がどのように相互に、そして要支援児童に関する成果に関連しているかを理解することが難しくなる。我々の目的は、これらの経験から学び、サービスが十分か、そしてサービスが要支援児童の生活にどのような変化をもたらすかを分析するための、標準化された方法を提供する成果の枠組みを開発することであった。

提案された指標の蓄積の実現の可能性と、これらのデータがサービスの計画と提供のための情報提供にどの程度役に立つかを評価するために、枠組みをさらに発展させ試す必要がある。いずれは、提案された指標のうちどれが、改善された成果と十分な関連性があるかを論証し、CSCS の健全性を示す指標をまとめることができることを望む。

参考文献

- Association of Directors of Children's Services (2018). Safeguarding Pressures Phase 6.
 Research Report. Manchester: The Association of Directors of Children's Services Ltd (ADCS).
- Baginsky, M., Moriarty, J., Manthorpe, J., Beecham, J., & Hickman, B. (2017). Evaluation of signs of safety in 10 pilots: Research report. London: Department for Education.
- Beecham, J., & Sinclair, I. (2007). Costs and outcomes in children's social care: messages form research. London: Jessica Kingsley Publishing.
- Beninger K., & Clay, D. (2017). Implementation evaluation of Doncaster Children's Services Trust: Final report. London: Department for Education.
- Bowyer, S., Gillson, D., Holmes, L., Preston, O., & Trivedi, H. (2018). Edge of Care Cost Calculator: Change Project Report. Devon: Research in Practice.
- Bryant, B., Parish, N., & Rea, S. (2016). Action research into improvement in local children's services: Final research report, Spring 2016. London: ISOS Partnership, Local Government Association.
- Bywaters, P., Bunting, L., Davidson, G., Hanratty, J., Mason, W., McCartan, C., & Steils, N. (2016). The relationship between poverty, child abuse and neglect: an evidence review.
 York: Joseph Rowntree Foundation.
- Canwell, A., Hannan, S., Longfils, H., & Edwards, A. (2011). Resourceful leadership: how
 directors of children's services improve outcomes for children: full report.
 Nottingham: National College for Leadership of Schools and Children's Services.
- · Care Crisis Review: Options for change (2018). London: Family Rights Group.
- · Children Act (1989). London: Her Majesty's Stationary Office.
- Children's Commissioner (2018). Stability Index 2018. Overview and Findings. London: Children's Commissioner.
- Crenna-Jennings, W. (2018). Vulnerable children and social care in England: A review of the evidence. London: Education Policy Institute.
- Department for Education (2015). The children's safeguarding performance information framework. London: Department for Education.
- Department for Education (2016). Putting children first. Delivering our vision for excellent children's social care. London: Department for Education.
- Department for Education (2018a). Children in Need of help and protection. Preliminary longitudinal analysis. London: Department for Education.
- Department for Education (2018b). Children in need census 2018 to 2019. Guide for local authorities version 1.2. London: Department for Education.

- Department for Education (2019). Children looked after by local authorities in England.
 Guide to the SSDA903 collection 1 April 2018 to 31 March 2019 Version 1.3. London:
 Department for Education.
- Fauth, R., Jelicic, H., Hart, D., Burton, S., & Shemmings, D. (2010). Effective practice to protect children living in 'highly resistant' families. London: Centre for Excellence and Outcomes in Children and Young People's Services (C4EO).
- Forrester, D. (2017). Outcomes in children's social care. Journal of Children's Services, 12(2-3), 144-157.
- Forrester, D., Westlake, D., McCann, M., Thurnham, A., Shefer, G., Glynn, G., & Killian, M. (2013). Reclaiming social work? An evaluation of systemic units as an approach to delivering children's services. Bedfordshire: University of Bedfordshire.
- HM Government (2018). Working Together to Safeguard Children. A guide to inter-agency working to safeguard and promote the welfare of children. London: HM Government.
- Holmes, L., & McDermid, S. (2012). Understanding Costs and Outcomes in Child Welfare Services: A Comprehensive Costing Approach to Managing Your Resources. London: Jessica Kingsley Publishers.
- Hood, R., Goldacre, A., Grant, R., & Jones, R. (2016). Exploring Demand and Provision in English Child Protection Services. British Journal of Social Work, 46(4), 923-941.
- ISOS Partnership (2017). Enabling improvement. Research into the role and models of external improvement support for local children's services. London: Local Government Association.
- Johnson, P., Kelly, E., Lee, T., Stoye, G., Zaranko, B., Charlesworth, A., Firth, Z., Gershlick, B., & Watt, T. (2018). Securing the future: funding health and social care to the 2030s. London: The Institute for Fiscal Studies.
- Kantar Public (2017) Implementation Evaluation of Slough Children's Services Trust: Final report. London: Department for Education.
- Kelly, E., Lee, T., Sibieta, L. and Waters, T. (2018). Public spending on children in England: 2000 to 2020, London: Children's Commissioner for England.
- La Valle, I., Holmes, L., Gill, C., Brown, R., Hart, D., & Barnard, M. (2016). Improving Children's Social Care Services: Results of a feasibility study. London: CAMHS Press.
- Mc Grath-Lone, L, Dearden, L, Harron, K, Nasim, B, Gilbert, R (2017). Factors associated
 with re-entry to out-of-home care among children in England. Child abuse & neglect, 63,
 73-83.
- McDermid, S. (2008). The nature and availability of child level data on children in need for use by Children's Services practitioners and managers. Research Policy and Planning, 26(3), 183-192.
- McNeish, D., Sebba, J., Luke, N., & Rees, A. (2017). What have we learned about good social work systems and practice? Children's Social Care Innovation Programme. Thematic Report 1. London: Department for Education.
- Munro, E., & Hubbard, A. (2011). A systems approach to evaluating organisational change in children's social care. British Journal of Social Work, 41(4), 726-743.

- National Audit Office (2019). Pressures on children's social care. London: National Audit Office.
- Ofsted (2015). Joining the dots...Effective leadership in children's services.

 Manchester: Ofsted.
- Ofsted (2019). Framework, evaluation criteria and inspector guidance for the inspections of local authority children's services. Manchester: Ofsted.
- Sebba, J., Berridge, D., Luke, N., Fletcher, J., Bell, K., Strand, S., Tomas, S., Sinclair, I.,&O' Higgins, A. (2015). The Educational Progress of Looked After Children in England: Linking Care and Educational Data. Nuffield Foundation.
- Sebba, J., Luke, N., McNeish, D., & Rees, A. (2017). Children's Social Care Innovation Programme: Final evaluation report. London: Department for Education.
- Selwyn, J., & Briheim-Crookall, L. (2017). Our Lives Our Care. Looked after children's views on their well-being. Bristol: University of Bristol and Coram Voice.
- Selwyn, J., Wood, M., & Newman, T. (2017). Looked after children and young people in England: Developing measures of subjective well-being. Child Indicators Research, 10(2), 363-380.
- Stanford, M., & Lennon, M. (2019). Estimating Children's Services spending on vulnerable children. Vulnerability technical spend report. London: Children's Commissioner.
- The Policy, Ethics and Human Rights Committee (2014). The Code of Ethics for Social Work. Birmingham: British Association of Social Workers.
- Thomas, C (2018). Care Crisis Review: Factors contributing to national increases in numbers of looked after children and applications for care orders. London: Family Rights Group.
- Ward, H., Holmes, L., & Soper, J. (2008). Costs and Consequences of Placing Children in Care. London: Jessica Kingsley Publishers.
- Wilkins, D., & Antonopoulou, V. (2019). Ofsted and Children's Services: What Performance Indicators and Other Factors Are Associated with Better Inspection Results? The British Journal of Social Work, 1-18.

早稲田大学研究院総合研究機構 社会的養育研究所 監訳チーム

担当:三輪清子(明治学院大学)

2021 (令和3) 年6月

